

人文会 NEWS

2015.12

no.

122

— 15分で読む —

アクティブラーニングとはなにか——「わかった」を引き出す授業を目指して……………

森 朋子 1

— 書店現場から —

丸善ジュンク堂書店 社内研修会について……………

森 暁子 15

— 図書館レポート —

公共図書館の選書……………

吉田倫子 22

— 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑦ —

神と、仏と、哲学と——「現代哲学への招待」への招待……………

小林公二 33

2015年特約店グループ訪問報告

2015年研修旅行報告

人と社会の核心にある問題へ
向けて、深く垂鉛をおろして
考えつづけた思想家の軌跡

吉本隆明 全集

全38巻・別巻1

第8回記念 第11巻 [1969-1971]

大学紛争をひとつの背景とする『情況』
と、1969～71年の天皇制論、および
重要な講演「南島論」などを収録。

月報 磯崎新・ハルノ宵子
本体価格 6500円＋税

晶文社 <http://www.shobunsha.co.jp>
〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

野の医者は笑う

心の治療とは何か？

東畑閑人著 若き臨床心理士が怪しいヒー
ラーの治療を受け、話を聴いて回る冒険譚。
フィールドワークで心の治療を根底から問
い直す話題作。舞台は沖縄！ 1900円

ケアをすることの意味

病む人とともに在ることの心理学と医療人類学
皆藤 章編・監訳／アーサー・クラインマン・
江口重幸・皆藤 章著 ケアをすることに關
する深刻な議論を喚起し、医学・看護・心
理学教育と実践・研究におけるケアの位置
づけの再考を促す。 2400円

職場のポジティブ メンタルヘルス

現場で活かせる最新理論

島津明人編著 従業員のメンタルヘルス対
策に役立つ最新理論の活かし方を第一線の
研究者が実践例とともに紹介。すぐに使え
るちょっとした工夫が満載！ 1800円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666 (税別)

レイシズムを解剖する

在日コリアンへの偏見とインターネット

高史明

「行儀が悪い」ものであった、在日コリアンへの差別偏見が再び繰り返
返されているのはなぜなのか。レイシズムの実態を明らかに。

下層化する女性たち

労働と家庭からの排除と貧困

小杉礼子・宮本みち子「編著」

本体2500円＋税

労働市場と家庭からこぼれた若年女性が貧困に陥るケースが増
えている。女性の貧困問題を可視化し、社会的支援策を検討する。

ディープ・アクティブラーニング

大学授業を深化させるために

松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター「編著」

本体3000円＋税

「教育から学習への転換」の鍵として注目のアクティブラーニング。
カリキュラム、授業、評価、学習環境を検討する。

勁草書房 <http://www.keisoshobo.co.jp>
TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854
〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1

ダニエル・C・ラッセル「編」 ケンブリッジ・コンパニオン 徳倫理学



●立花幸司監訳 個々の行為でなく生全体の
善さを希求する今注目の倫理思想。歴史的展
開を丁寧に追い、考え方を懇切に解説、また
環境・医療・ビジネス・政治など応用倫理の場
面をも網羅した最良の入門書。 5200円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611 (価格税別)
<http://www.shunjusha.co.jp/>

アクティブラーニングとはなにか——「わかった」を引き出す授業を目指して

森 朋子（関西大学教育推進部准教授）

はじめに

アクティブラーニングという言葉をよく耳にするようになった。大学教育ではすでに流通している用語だが、最近では特に大学以外の学校現場から多く聞こえてくる。さらにそれは教育産業にも波及し、アクティブラーニングに関する企画や商品の売り込みも増えてきた。アクティブラーニング用に開発されたグループワーク用のイスやテーブルの販売チラシを見ると、まさに今ブームが見えない手によって創られていることを実感し、いつからこんな風になったのだろうと考えてみたりする。そして「ゆとり教育」のように数年後には世論の振り子が大

きく反対に振れないだろうかと少し不安に思う。しかし、ブームをただのブームで終わらせず、目の前の学習者の学びの質を高める一つのきっかけとして、その波を活用して現場を動かしていくことは十分に可能なはずだ。そのためには何をしたらよいのだろうか。それを考える前にまずはアクティブラーニングをどのように理解したらよいのかを考えてみよう。

「何をしたらアクティブラーニングなのか」とよく聞かれるが、その答えは非常に難しい。すぐに思いつくのは、学習者が何かしら行動で表せる学習活動を行っているイメージだろう。しかし、だからといってグループワークを導入したり、「お調べ」学習の内容を発表したらアクティブラーニングなのかといえれば、きつとそう

ではないだろう。その意味では、アクティブラーニングは学びの質を問う観点であり、学習観でもあるといえる。であるので、明日からすぐに使えるアクティブラーニングの技法を期待していた読者には申し訳ないが、今回はアクティブラーニングについて、HowやWhatよりも、Whyの部分に焦点を当てて私流に紹介したい。

アクティブラーニングとは何か

アクティブラーニングとは何か。そもそも「能動的学習」や「主体的学習」、もう少し範囲を広げれば「協同・協調学習」や「学びの共同体」など、日本でもアクティブラーニングに近い概念が初等・中等教育で導入されてすでに久しい。それにもかかわらず、ここ数年アクティブラーニングが日本の大学教育で急激に導入されたのは、まさに上記の類似概念の浸透が浅かったことも理由に挙げられるだろう。

だいたいカタカナで表記されるのはなぜか。溝上慎一が『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』で述べていた通り、その理由は新奇性だと私も思う。

カタカナであれば、黒船よろしく何やら新しい概念が外国からやってきた気分になり、その結果、周りが巻き込まれたり、これまでの類似概念が再認識された可能性が高い。その裏返しでいえば、アクティブラーニングは、現場の教育者が日々行っている試行錯誤の取り組みの一部であり、よくよく聞いてみれば、これまで自らがやっていた実践そのものがアクティブラーニングだったというオチもよくあるのだ。

その定義もいろいろだ。一つの大きな節目は2008年に中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」において、初めて教育政策としてアクティブラーニングが推奨されはじめ、その用語集に「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と規定されたことによる。それに似たような定義がたくさんある中、今、一番引用されているのが前述の溝上の著作にある「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外

化を伴う」というものである。その特徴は、講義を座って聴く、ということを乗り越える具体的な活動（書く、話す、発表する等）が示されていることと、「認知プロセスの外化」、つまり思考しているその過程が外に表れてくることが必要と考えていることだ。

ただ、アクティブラーニングを一つの教育学習方法としてのみ捉えてしまうのは少々危険である。巻頭に記したように、グループワークや「お調べ」学習を導入したからアクティブラーニングなのかといえば、そうではないはずである。大事なはその背景にこれまでの教育観を揺るがす大きな認識の変化があるということを理解することだ。溝上の著書表題にあるように、教育の成果は教員が「何を教えたか」からその結果、「学習者が何を学んだか」にパラダイム転換した。その必要性は次節で述べるが、これがいわゆる教授学習（教育学習）のパラダイム転換である。その認識の大きな転換の中で、アクティブラーニングはまさに、学習者がより深い理解と能力を獲得するための具体的な方法として示されているのだ。従来の教育パラダイムのもとでは「教えなければならぬ内容」をどのように伝えるか」に重点が置かれており、

まさに授業の主体は教員であった。その意味では、学生の理解とはまた違ったところで教育のみの責務を果たしていたのである。しかしバーとタッグは、このパラダイムでは「目的」と「手段」を取り違えているのではないかと指摘している（Robert B. Barr & John Tagg, “From Teaching to Learning A New Paradigm for Undergraduate Education”, *Change*, 1995 参照）。大学において教育はあくまでも学生の成長を促す「手段」であり、授業での活動の主体は学生でなければならぬのだ。板書をノートに写すことでは学習は想起しない。教員の知識をコピーすることでは新しいものは何も生まれないのである。

なぜアクティブラーニングなのか

このような教育学習のパラダイム転換の中で、アクティブラーニングが大学で早急に導入された背景には、大きく分けて2つの理由がある。1つ目は社会からの要請である。産業革命以降、大量消費時代を背景に日本に限らず欧米社会でも、正解がある問いに対してすばやく正確にインプットした知識を再提示する能力が必要とさ

れていた。だからこそ社会に人材を輩出する学校教育における価値ある学習は暗記であり、浅く広く学ばなければならぬ大学入試が定着し、「賢さ」を測る試験は、再生産性を簡単に測ることのできるマークシートが偏重されてきた。「よい学習」とは、何が評価されるかを探り、その内容によって戦略を立て、可能な限り高い成績を取る浅い戦略的なアプローチのことだったのである(松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』)。

しかし80年代以降、アメリカを迫るように日本の社会も著しく変化を遂げる。急激な情報化、そしてバブル崩壊やリーマンショックなどの経済破綻である。さらには未曾有の自然災害を経験したことにより、これまでの様々な社会システムや物事の認識が変わってしまった。その変化の顕著なものが年功序列の終身雇用制度の崩壊である。その影響はこれまでの経済成長下にあった子どもたちを「よい学校、よい就職先に押し込みさえすれば幸せ」という教員が持つ教育観をも潰してしまったことになる。そこに新たな価値が生まれ出した。それが「新しい能力」である(松下佳代『新しい能力は教育を変えるか』)。「新しい能力」とは、すなわち既存の知識を暗記する力

ではなく、教師も解答を知らない課題に仲間と取り組む中で新たな価値を社会で生み出す力である。知識基盤社会^①の到来が新たな学習観を示したのだ。その結果、大学は学問の府としてのみ存在するのではなく、多様性や創造性を備えた協調性の高い人材を輩出する機関として、知識のみならず、それらを活用するコンピテンシー(文部科学省定義「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力」)の育成が求められている。この力を育成する教授学習方法がまさにアクティブラーニングだ。一斉授業を聴くという行為では身につかない。まさに「書く、話す、発表する等の認知プロセスの外化」によってコンピテンシーが育成されることになる。

日本でコンピテンシーが意識されたのは、初中等教育において2006年文部科学省が提唱した「生きる力」ではないだろうか。それから「リテラシー」(OECD PISA)、「学力の3要素」(学校教育法)と立て続けにコンピテンシーに関する指針が提示されている。大学教育でも「社会人基礎力」(経済産業省)、「学士力」(文部科学省)、

キー・コンピテンシー(OECD AHELO D・S・ライチェン、R・H・サルガニク『キー・コンピテンシー』)など、矢継ぎ早である。

教育目標にコンピテンシーが加わるということは、当然ながら教育方法と教育評価も大きく変えざるを得ない。方法に関しての転換がまさにアクティブラーニングの導入であり、それらと評価の問題は切っても切り離せない。評価に関しては近年立て続けに指針となる本が出版されている。石井英真『今求められる学力と学びとは』、奈須正裕『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる』は学校教育において、西岡加名恵『新しい教育評価入門』は様々な学びの場面におけるコンピテンシーと評価について論じている。また、これらの「新しい能力」の指針に、最近新たに加わったのが「21世紀型能力」(P・グリフィン『21世紀型スキル』)であり、まさに前述の知識基盤社会に必要なスキルとしてまとめられている。この21世紀型能力は、文部科学省が現在係わっている次期学習指導要領や高大接続改革にも大きな影響を与えており、今後の動向に目が離せない。

アクティブラーニングが推奨される2つ目の理由は、

認知研究に関係がある。20世紀に入って脳の仕組みが分かるにつれて、学習を対象に、科学的にその構造を解明するアプローチが学問として起きてきた。いわゆる認知科学や脳科学である。学習をテーマとして、その仕組みや促進する環境条件の抽出などを実験室研究や現実の教育現場において明らかにすることが認知研究の主な目的だ。その中で人が深く学ぶには、他者との協同・協働的活動における主体性が重要だということが明らかになっており、それがアクティブラーニング論と結びついている。つまり、1つ目の理由は教育学的な「○○すべき」という「理念」からトップダウン的に発しているとしたら、2つ目の理由はまさに学びが想起している現場において、そのメカニズムや要因を科学的な手法を用いてボトムアップ的に「理論化」しようとする立場である。後者の立ち位置においては、そもそも人は主体的に学ぶ存在であることが前提である。その意味においては、アクティブラーニング論の中でも「アクティブでない学びなんてあるのか？」といった論争もある。私は学習研究者なのでまさにコチラ側の思考が根底にあったりする。そもそも人は能動的学習者であることを前提に、その学び

の構造を明らかにした上で、学びを推進する教授デザインや環境について考えていくという方向性である。この立場で書かれた著書には、佐伯胖『「わかる」ということの意味 新版』、『「学び」の構造』をはじめとして、杉江修治ほか『大学授業を活性化する方法』、大島純ほか『教授・学習過程論 学習科学の展開』、今井むつみほか『新・人が学ぶということ』、秋田喜代美『学びの心理学 授業をデザインする』、E・O・キーン『理解するってどういうこと?』などがあるのでご参照いただきたい。

ここでは理念と理論の2つの観点からアクティブラーニングがなぜ必要とされ大学教育に導入されたかを述べた。この2つの出発点は違うものの、その目的は学習者の能動性・主体性を主眼に置いているというところでは一致している。

この流れはすぐに中等教育に到達する。2014年に文部科学省中央教育審議会にアクティブラーニングが諮問されたので、次期の学習指導要領の核になるだろう。「学習」のための指導要領だが、これまではなぜか教える内容の基準が記されていた。次期ではその名の通

り、学習の基準が示される。

教育政策から離れて、アクティブラーニングを導入した際の教育現場のメリットは何かも考えてみよう。学び手、つまり学習者のメリットは、学習研究の面ではより深い理解が得られるということになる。そして教育学の観点でいえば、コンピテンシーや主体性の育成につながる。では教え手、つまり教員へのメリットはなんだろう。教員が学習者の理解度を測りながら授業を行っていくことを丸野は「対話による授業」と呼んでいる(高垣マユミ『授業デザインの最前線II』)。そして今の授業の状況を教員自身が客観的に把握する能力を授業に関するメタ認知として「メタ教授」と名付けている。一斉授業や講義を教育方法として否定するわけではないが、聴くという学習活動においては、「学習者が何をどのように理解しているのか」、また「理解が足りないところはどこか」が教員からは見えにくい。アクティブラーニングは学習者の「認知プロセスの外化」を伴うことで、まさにこれまで授業中において把握が難しかった学習者の理解と、対話しながら「授業を進行できる。つまりメタ教授に大きなメリットがあるということだ。

アクティブラーニングが抱える問題

アクティブラーニングの導入が先行している大学で、現在すでに多くの実践が展開されている。授業における学習者の理解や活動を研究対象としている私は、多くのアクティブラーニング系の授業を参観しているのだが、そこであることに気が付いて愕然とした。目の前の学生たちの学びの質に大きな格差があるのだ。講義型授業では、やる気を持って講義を聴くか聴かないかでその効果に大きな格差があるのは周知のごとくである。アクティブラーニング導入によって、それを乗り越えたはずなのに、今度は違う形で学びの格差が現れている。協調場面において他者の成功にただ乗りするフリーライダーの出現やグループワークの非活性化、そして思考と活動の乖離である。加えて学生のアクティブラーニングに関する理解不足も気になるところである。ベネッセが4年に一度、約5000名の大学生を対象に学習や生活に関する調査を行っているが〔第2回 大学生の学習・生活実態調査報告〕2012年、この中でも8割の学生が、主体的

に取り組む演習形式の学習より、講義を聴くことを好んでいるという結果が出ている。教育目標としては、知識基盤社会に適した「解のない課題に取り組む」この意義を意識しているが、そこにたどり着くための方法としては講義を選択するということになる。まさにミスマッチである。

上記の課題の中で特に思考と活動の乖離問題は見逃せない。まさに戦後の経験主義教育が活動を重視するあまりに学問を軽視した「這い回る経験主義」への批判とオーバーラップしているようにも見える。この問題に市川伸一は「教える」という教育的行為を再考し、「教える」と「学ぶ」の組み合わせで学習の促進を図る「教えて考えさせる授業」を提唱した。（市川伸一「教えて考えさせる授業」の挑戦、「『教えて考えさせる授業』を創る」）また松下は、認知プロセスの外化は本来のアクティブラーニングが持つべき特徴だが、そのための前提には、知識の習得や理解（内化）が不可欠だという見解を示している。そして深い理解を伴ったアクティブラーニングを「ディープ・アクティブラーニング」と称して活動中心のアクティブラーニングに警鐘を鳴らしている（松下佳代

『ディープ・アクティブラーニング』。

グループワークをどのように活性化するかについてもすでにいろいろな知見がある。佐藤学は単なるグループワークを否定する（佐藤学『学校を改革する』）。知っていること、つまり既有知識を交換し合っているだけでは、新たな学びは生まれにくいことから、「学びの共同体」における主体的な学びが必要だと説く。佐藤と同様に心理学をベースにした協同学習でも、互恵的な信頼関係を基盤とした協同を謳っている（D・W・ジョンソン『学習の輪』、杉江修治『協同学習入門』など）。認知科学の知見の書には亀田達也『合議の知を求めて』や植田一博『協同の知を探る』などがある。特に個人的には亀田が面白い。実は実験研究では、集団討議のほうが個別に考えた時よりも結果が悪いのだ。本書では「それがいったいなぜなのか」を面白くまとめてある。

ディープ・アクティブラーニング

活動だけがアクティブではない、深い理解を伴ったディープ・アクティブラーニングを目指すデザインには

どのようなものがあるのだろうか。具体例を挙げてみよう。

ジグソー法

そもそもはアメリカの社会学者アロンソンによって編み出された方法だ。具体的なやり方としては、学ぶべき内容を例えば4名で切り分けて受け持ち、その理解を持ち寄って互いに教え合い、学び合う授業デザインである。それぞれ自分が担当した箇所については、自分しか情報を持たない仕掛けであり、だからこそのメンバーに教える必然性や責任が生じる。これだとグループワークで課題となっていたフリーライダーが出にくいのも特徴だ。ジグソー法はその後、学習科学者たちに洗練され、知識構成型ジグソーとしてさらにデザインを進化させている。東京大学発教育支援コンソーシアム推進機構（COREF）では、この知識構成型ジグソーの普及を目的に、様々な実践事例をハンドブックにまとめている。HPからダウンロードできるので、ぜひ参照いただきたい（<http://coref-u-tokyo.ac.jp/archives/14883> 2015年10月28日参照）。このCOREFのハンドブックの中の事例を一部紹介

すると、例えば高三生物の授業では、「葉はなぜ緑か」という課題設定において、「色」、「葉緑素」そして「エンゲルマンの実験」の3つに学習要素を分け、3名一組で活動を行うものである。

ジグソー法の特徴として、前述でも述べたが、まずはグループワークが比較的成功しやすいデザインであることは間違いがない。さらに一番大きな特徴が、「教えること」を前提にしていないということではないだろうか。一般的なジグソーも知識構成型ジグソーも、他者との教え合い学び合いの中で自らの知識を構築していくというプロセスそのものが学習なのである。学習研究者のように「人はそもそも主体的に学ぶ存在である」という理念が根底にあれば抵抗はないが、「教えない」という選択肢は、教員を不安にさせることもよくあるようである。

課題発見・解決型学習(PBL)

PBLは身近な問題や事例を素材としながら、具体的な問題解決に向けてグループ討議を行っていく授業デザインである。特に実社会におけるリアルな課題が授業内で扱われることで、学習者のやる気が高まることが特

徴である。もともとは欧米の医学教育で採用されていたのだが、今では他の様々な学問分野にも応用されている。

PBLには大きく分けて2つのタイプがある。初年次教育向けと高次学年向けである。最近までPBLは現実社会の課題を扱う関係上、解決に向けた専門性が求められることが多かった。大学でいえば、そのまま共同研究として卒業論文のテーマにも成り得るレベルである。それは課題を提供している側が現実としてその課題の解決を期待しているからだ。工学部系の専門教育を対象にしたPBLでは、実際に学生の視点を加えることによって生産ラインの見直しや新商品の開発に大きく貢献する場合もある。それに加えて、近年では入学直後の一年生を対象とした初年次教育でPBLが展開されている大学が多くなった。教員から一方的に教えられることが多い高校までと異なり、入学後からいきなり主体的な学習を求めることが多い大学では、その移行がうまくいかずにドロップアウトしていく学生が一定の割合で存在する。そこで学問分野への動機づけと居場所づくりのために一つの課題をグループで取り組む初年次教育型PBLが展開されるようになった。この場合、医歯

薬学部のようにすでに答えがわかっている課題をテーマ設定する場合もあるが、「現実社会の課題に対応できる知識と能力を今は持ちえない」ということを実感させるために、地域や企業から現実に直面している課題を提供いただくこともある。先日、S大学の初年次教育型PBLを参観させてもらったが、そこでは授業の終盤に学生グループが課題提供者に対して課題解決のプレゼンテーションを行い、コメントをもらおうというデザインだった。学生には厳しい評価内容もあったが、現実の課題だけに授業の目的通り、学生の専門教育へのやる気は高まった様子だ。

同じように現実社会の課題に取り組むPBL型アクティブラーニングにサービスマラーニングがある。サービスマラーニングはPBLと同様に、現実社会の課題に取り組むアクティブラーニングだ。違いといえば、サービスという名前が付いていることでも明らかのように、何かしらの社会貢献を視野に入れていることである。PBLが課題に取り組むそのプロセスの中に学びを見出すとしたら、サービスマラーニングはまさに現実社会において貢献できるところから社会に参加していくことで、

学生が自らの社会的役割を自覚することを価値とするものだ。

社会と連携したPBLやサービスマラーニングは、これまで小中等教育では好まれた学習活動だった。しかしアクティブラーニングの観点から見れば、「そこに活動や体験重視型に偏る傾向はないか」「事前学習、または他の教科で得た知識を十分に活用できるデザインになっているか」、さらに「体験がその後も他活動にどのようにつながっていくのか」を検討しなければならない。子どもたちにとっては、社会連携で行うPBLと、いつも座って受けている授業が切り離されて位置づけられてしまうと、目の前の活動だけをこなす浅い戦略的なアプローチをさらに強化することになってしまう。いくつかの学校ですでに導入されている解決方法としては、1つの状況にアンカー(碇)を打つことである。これはアンカード・インスタレーションと呼ばれる手法で、例えば複数の教科において、常に事例を出す場合は、同じA市を舞台に説明をすることを継続的に行っていく。そうすると子どもたちの中でバラバラであった教科ごとの知識は、A市という状況によって統合されやすくなる。この

ような活動もアクティブラーニングを活性化するためには有効なのだが、複数の授業を同じ教員が担当する小学校と違い、中等高等教育では授業担当者同士の連携やカリキュラムでの検討が必須となる。

反転授業

20世紀後半にアメリカで生まれ、草の根で広まった反転授業は、説明中心の講義などを動画化し、事前学習として学習者に視聴を促すことを前提に、対面授業では受講者がより主体的に学ぶ演習やプロジェクト型学習のアクティブラーニングを行う授業形態全般を指す。動画と聞くと、教育学習方法として少しハードルが高いようにも聞こえるが、簡単なものであればタブレットで簡単にできるソフトも今ではたくさんある。

反転授業の大きな特徴は、アクティブラーニングとして対面授業では学習者の活動に焦点を当てているものの、ジグソー法やPBLとは大きく違い、そのデザインの中に動画という「教える」を最初から組み込んでいることである。アクティブラーニングの課題であった知識と活動の乖離を、この反転授業では事前の「教える」とい

う知識提供をもって回避しようということになる。前述の市川の「教えてから学ぶ授業」と同じコンセプトだ。ただ「教えてから学ぶ授業」との違いは、「反転授業の「教える」は動画という形で授業の予習学習として位置づいていること、さらにはその「教える」はICT²の活用によって道具として位置づけられることである。後者についても少し詳しく説明しよう。「教えて学ぶ授業」の「教える」の部分における主体は、一斉授業同様の教員である。反転授業でも動画の画面で教えているのはもちろん教員であることは同じだが、学習者の必要に応じて、何度でもパソコンやタブレット、スマートフォンの中にその「教える」を呼び出すことができるのだ。

大学での事例では、その多くが予習学習に使われるはずのこの動画が、テスト前の復習に使われたり、対面授業でのグループワーク中にスマートフォンで呼び出し、みんなで確認したりと場面によって違う使い方をされている。「教える」を道具として使うこと、まさに学習者の主体性が発揮されることを意味しているだろう。

ただ、反転授業がもつ構造的な課題は、事前学習が必須であることだ。大学を例に挙げれば、往々にして学習

時間が少ないことが指摘されがちな日本の大学生にとって、事前学習が必須という授業は負荷が高い。日本においては今まさにその学びのプロセスを解明する実践的研究が進みつつあり、平成28年には私が編者となって反転授業の理論・実践本も出版される予定である。

初等教育でも成功している事例は多くあるが、事前学習のメリットや効果を成人のように理解した上でアクティブラーニングに臨むわけではないところが難しい。事前学習はまさに家庭学習として保護者下に置かれる学習として位置づけられるが、公教育だとその責任を一部保護者に転嫁しているのではないかとという批判も出ている。私も個人的には、反転授業はそのメリットを理解できる成人教育に近い環境、つまり高校生以上の大人にとって有益なアクティブラーニングデザインだと思う。その一番の理由は「教える」を道具として使うか否かというところだろう。学習者は本棚の本を取るように、好きな時に好きなだけ、手元にある端末を使って「教える」を呼び出す。まさに近未来的なデジタル教科書である。

最後に

アクティブラーニングでは、活動の主語は学習者であり、学びの主体も学習者である。その学びの質を高めるためには、他者との協同や協調が不可欠であり、その認知のプロセスを、書く、話すなどの活動によって外に表す外化の活動が伴う。このようにアクティブラーニングでは外に向けた活動、すなわち外化に注目が集まりがちだが、実は成功しているアクティブラーニングの多くは、必要な知識の獲得という内化もうまく組み込まれているのだ。もちろんアクティブラーニングと称されているものには、知識の内化が伴わない初年次教育のような別の意義を持ったものもあり、コンピテンシーの育成や共同体の構築、そして情意面にとってはとても大きな効果を発揮していることは十分に理解できる。ただ元来、日本の学校教育においては、そのような活動は部活をはじめ、運動会や体育祭、文化祭などの正課カリキュラムに掛からない学校活動の中で展開されてきた経緯がある。知識理解を伴わないアクティブラーニングをカリキュラムに

入れるかどうかは、目の前の学習者の資質や学習経験等を見極めた学校ごとの判断になろう。

ラーニングデザインが生まれていく。

《注》

(1) 平成17年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」にて提示された語。

21世紀はこの「知識基盤社会」(Knowledge-based society)の時代とされ、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」と定義される。

(2) 情報処理および情報通信に関連する科学技術の総称でIT(Information Technology)とはば同義。日本ではITの方が定着しているが、海外ではICTの方がより一般的に使用される。

森 朋子(もりともこ)

関西大学教育推進部准教授。大阪大学博士(言語文化学)。

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程単位取得退学。

島根大学教育開発センター准教授を経て、2014年より現職。

専門は学習研究。特にアクティブラーニングの学びの構造とそのプロセスの解明をテーマに実践的研究を行っている。

主な著作に、「コラム 反転授業『ディープ・アクティブラーニング』(松下佳代編著、勁草書房、2014年)」「分担執筆」

「初年次セミナー導入時の授業デザイン」「初年次教育の現状と

未来」(初年次教育学会編、世界思想社、2013年)、など。

これからの大学教育、さらに次期学習指導要領では、教育学習内容に限らず、方法や評価への関与の大きくなってくる。これらを締め付けとはとらえず、学習者の学びの質向上に向けた1つのトータルデザインとして捉えていくことで、教員の資質も大事にしたアクティブ

15分で読む アクティブラーニングとはなにか・ブックガイド

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
ミネルヴァ書房	4623058594	“新しい能力”は教育を変えるか	松下佳代	4500	2010
ぎょうせい	4324098301	シリーズ学びの潮流1 知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる	奈須正裕編	2400	2014
日本標準	4820805823	今求められる学力と学びとは	石井英真	900	2015
明石書店	4750323503	キー・コンピテンシー	D・S・ライチェン、 R・H・サルガニク編著	3800	2006
有斐閣	4641174078	新しい教育評価入門	西岡加名恵ほか編	2000	2015
北大路書房	4762828577	21世紀型スキル	P・グリフィンほか編	2700	2014
北樹出版	4779303210	新・人が学ぶということ	今井むつみほか	2600	2012
新曜社	4788514096	理解するってどういうこと?	E・O・キーン	2200	2014
岩波書店	4000039390	「わかる」ということの意味 〔新版〕	佐伯胖	1900	1995
東洋館出版社	4491002774	「学び」の構造	佐伯胖	1456	2000
玉川大学出版部	4472403002	大学授業を活性化する方法	杉江修治ほか編著	2800	2004
放送大学教育振興会	4595126192	教授・学習過程論	大島純ほか編	2200	2006*
左右社	4903500850	学びの心理学	秋田喜代美	1600	2012
勁草書房	4326251018	ディープ・アクティブラーニング	松下佳代編著	3000	2015
明治図書出版	4181925109	「学びの共同体」の実践 学びが開く!高校の授業	佐藤学ほか編	2260	2015
明治図書出版	4180638239	「学びの共同体」で変わる!高校の授業	佐藤学ほか編	2260	2013
明治図書出版	4180620289	「教えて考えさせる授業」の挑戦	市川伸一	2100	2013
図書文化社	4810085105	「教えて考えさせる授業」を創る	市川伸一	1400	2008
東信堂	4798912462	アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換	溝上慎一	2400	2014
ナカニシヤ出版	4779508318	高校・大学から仕事へのトランジション	溝上慎一・松下佳代編	2800	2014
岩波ブックレット	4002708423	学校を改革する	佐藤学	520	2012
ナカニシヤ出版	4779505737	協同学習入門	杉江修治	1800	2011
二瓶社	4861080579	学習の輪 改訂新版	D・W・ジョンソン	1800	2010
共立出版	4320094369	協同の知を探る	植田一博・岡田猛編著	3800	2000*
共立出版	4320028531	合議の知を求めて	亀田達也	2700	1997
北大路書房	4762827082	授業デザインの最前線II	高垣マユミ	3000	2010

*は、品切れの可能性がります。

一書店現場から一

丸善ジュンク堂書店 社内研修会について

森 暁子（ジュンク堂書店池袋本店）

丸善ジュンク堂書店では、3年に一度ぐらいの割合で全国の社員が東京に集まり社員会を行っている。全国の社員が一度に集まるのはもちろん不可能なので、前後半2回に分けて行うのだが、その際、せっかく全国から社員が集まるのだから、同じジャンルの担当者同士が集まって研修会を行ったらどうかという弊社岡副社長の提案がきっかけとなり、社員会と合わせて各ジャンルの研修会が行われることになった。今年で2回目のまだ始まったばかりの研修会である。

基幹店である池袋本店の人文書担当とのことで私がその研修会の企画、とりまとめを仰せつかったのだが、その際、地方の店舗の担当が東京にくるので普段なかなか会えない出版社の方々となるべく多く会ってもらいたい、また、同じ会社のスタッフ同士だけの研修会ではなく、出版社の方の視点、意見をとりいれた研修会にしたいと考え、書店との研修会のノウハウがある人文会にお声がけをさせていただき、オブザーバーという形で参加していただく

ことになった。

地方の店舗の担当者だけでなく、宿泊を必要としない首都圏の店舗の担当者も参加可能とし、前後半約10名ずつの担当者が参加した。研修会の内容は、「近隣店舗の見学」「講義」「討議」の形をとった。実地で自店以外の書店を見学し、座学で自ジャンルについての理解を深め、話し合うことで日々の棚業務についての問題点を共有する、という流れだ。

まず研修会を企画するにあたって、当日に行う講義の内容と、討議での議題を探るために必要なアンケートの作成と集計を行った。

はじめて行った研修会の時は弊社全店舗のスタッフにアンケートをとり、そこから最大公約数的にあげられている疑問点、問題点を参加メンバーで話し合ったが、日常業務を行わないがらの集計はかなり大変だったので今回は参加店舗のみにアンケートをとった。このアンケート内容については、当日の議題にするためだけではなく、研修会に参加できない他の店舗の担当者にも共有することを想定して、普段の仕事内容をおおまかに「新刊・既刊の発注」「棚出し・棚作り（返品作業も含む）」「常備」の3つに分け、それぞれの作業について特にどこに意識を置いて行っているか、疑問・問題点は何か、の2点を設問とし、人文書担当特有の事柄について普段なかなか話し合える機会のない担当者が参考、共感できるような内容にしたつもりだ。もちろん、せっかく出版社の方がいらっしゃる場なのだから、この機会に直

接聞いてみたいこと、その他議題にあげてほしいことも質問内容に盛り込んだ。

このアンケート作成とその結果の共有は、「問題意識を持って日々の仕事にあたってもらえるようにする」という研修会の意義の一つにあたる大事なポイントだ。

後に述べることになるが、研修会自体で何か劇的な解決策が出る、ということとはほとんどない、というよりそれを目標としていない。各店舗によって状況は違うため、一つの方法だけを提示するわけにはいかない。それよりも、人の仕事の方法の一端にふれることで自分の仕事を客観視し、他のアプローチの可能性について感じてもらえるような方向性を与えることと、悩みや問題意識を自分だけが感じているのではない、という共感をもってもらうことが大事だと考える。

それぞれが抱えている疑問、問題点は個人の能力だけではなく、業界全体の問題点であることも多く、その問題点に対してどういう対応をとっていくのかを自分なりに見つけて日々の棚業務にあたることのできる材料になればと考えている。

今回アンケートを集計したところ、普段の棚業務の中で苦手なジャンルとして特に「思想」「宗教」「教育」の3つのジャンルをあげている人が多いことがわかった。人文会の研修担当の東京大学出版会・橋元さんが講義をしてくださる方を選抜してくださり、当日は青土社の「現代思想」編集長の栗原さん、春秋社営業部の片桐さん、東京大学出版会編集部の後

藤さんの講義を拝聴できることになった。

それぞれの詳細についてははぶくが、ジャンルに精通している方々のお話は既存の棚について再検討する際の参考になり、また今後刊行される新刊書の位置づけのヒントになるようなお話ばかりで、参加者にとって大いに刺激になった。この場を借りて改めて御礼申し上げます。それぞれ質疑応答含め30分ずつお話しいただき、計1時間半の講義を終えた後、討議に移った。

研修会が始まる前に、弊社丸善&ジュンク堂書店渋谷店と、こちらも橋元さんのはからいで東大駒場生協を見学させていただいたので、討議のスタートはまずその感想を一人ずつ述べてもらった。この感想と、アンケートであがっていた疑問点とが結びつくようなところをとっかかりとして、実際の棚業務についてより具体的な話を参加者一人ひとりに振っていくことで討議を進めた。こういう話し合いの場になると、一部の人しか発言せず、他の人は押し黙ったまま、ということがよくあるため、話の進行上必要な大きなテーマについてはまずすべての人に発言してもらい、その後出た意見に応じてこちらから指名して答えてもらう、という形をとった。

討議はアンケートの順に沿ったが、今回多くの人が疑問点としてあげていたのが常備と返品についてだったので、1時間半ほどの討議の内の半分以上はこの2点について話し合った。

弊社はメイン帳合を大阪屋としている店舗が多いのだが、この研修会以前から大阪屋が返品率をさげるための具体的な対策を色々とって、それに関する様々な提案について各店舗としてどう考えたらよいか、多くのスタッフが疑問に思っていたのだ。

今年は特に、業界的に多種多様な動きを見せており、取次をとりまく環境もその一つにあげられる。その一つ一つについて、どう考え対応したら良いのか、いつも以上に書店員は不安を抱えているのではないかと思う。その中でこうした研修会でベテラン社員から、日常業務の基本的なこと（たとえば常備とはそもそも書店にとってどういったものであるのかなど）を改めて聞き、整理し、共有することで次の対応策が見えてくることがある。その場にベテラン社員がいないのであれば司会者がそのような方向性を示す流れを作らなければならない。もちろん、何か大きなことを決める際の決定権は会社にあるが、棚業務に関係することは各店舗、各ジャンルによって状況が違うため、担当者が適切な対応をとれることが望ましい。

店舗数が増え続けている中で、各店舗だけで人文書担当としての基礎知識を習得することは大変難しい状況にある。それを補完するための機能として弊社ではジャンルアドバイザー制度というものが設けられてはいるが、他の担当者の意見も参考にできるこうした研修会が果たせる役割も少なからずあると考える。一方で、中堅、ベテランにとっても、特にここ最近の業界の激動に対応するためにも他店の担当者と交流をもつことの意味は大きいと考えて

いる。

今回の研修会では先にも述べた通り、返品率について多くの人から関心が示された。返品を少なくすることは確かに大事だが、返品をおそれるあまり、なるべく仕入れをしない(特に新刊)というのは本筋ではないという考えが共有された。これについて特に印象的だったのは、参加されていた未来社の水谷さんから「新刊を仕入れないということは、その書店に来るお客様に対するサービス劣化であるだけでなく、書店員がその新刊に触れることができな」ということであり、自ら商品知識を増やす機会を狭めている」といった主旨の意見が出たことだった。もちろん、店舗規模によっては仕入れなくてもよいと思える新刊もあるし、既刊本でもいくら売れているからといって自店のストック場所なども省みず無駄な発注や適切でない在庫を持つことは推奨されない。しかし、返品率を気にして1冊2冊の仕入れにおびえるよりは、委託制度の意味を正しく把握した上で提供すべきものを的確に仕入れてしかるべき場所に展示し、販売する、という当たり前だけど実は習得の難しい能力の精度を担当者個々人が日々高めていくことを念頭に置いて業務にあたる他ない。

討議では全店舗に通ずるすばらしい解決策、というのは出てこない。当たり前のことを再確認し、各店に持ち帰った時にヒントになるような方向性を示せば十分研修会の機能を果たした、と言えるだろう。各店によって規模も客層も違うのだから、品揃えや棚作りなどの



筆者 近影

アプローチは異なっただけだ。忙しい日々でつい目先のことに翻弄され、その場しのぎの仕事になっていくことはありがちだし、ある日突然人文書担当になって右も左もわからず仕事をしている人もたくさんいる。そのような時に研修会で出た意見が担当者にとっての判断材料となり、自店舗に合わせて考えることができる担当者を育てる一つの役割となってくればと考える。

研修会終了後はすみやかに参加者から感想等を含めたアンケートをとり、その内容は人文会にもお送りしている。事前のアンケート、研修会当日の内容、研修会後の感想アンケートをまとめたものを各店の担当者に読んでもらうように配信する。受け取った各担当者がそれらを読んでどこにひっかかりを感じてくれるか、こちらではわからないが、より多くのことを感じ、考え、日々の業務に活かしてもらえるよう、研修会を企画運営するという視点だけではなく、「書店員教育」という大きな観点にたつて行うことができるよう今後も試行錯誤しながらよりよい方法を考えていきたい。

森 暁子（もり さとこ）

公共図書館の選書

吉田 倫子（横浜市中央図書館司書）

はじめに

筆者は現在、横浜市中央図書館で司書をしている。今年度は日本図書館協会の認定司書となり、図書館歴はほぼ四半世紀に近い、いわゆるベテランである。このたび、出版社の方々が興味を示されているので、日々の業務で培った経験や知見から、図書館の選定について寄稿をして欲しいとの依頼があり、謹んでお受けした。事実を元に正確な記述を心がけるが、意見部分は個人的なものであり、所属する館や館界を代表するものではないことを最初にお断りしておきたい。

図書館における選定の基本

図書館の選定というと、購入する本を選ぶ場合だけと思われがちだが、収集における資料選択（いわゆる選書）は、図書館における資料選定の最初の段階に過ぎない。公共図書館には、「その図書館をどういう図書館にしたいか」というビジョンをあらわす運営方針があって、それに基づいて収集・保存・廃棄の方針を定めて蔵書構築を行い、公開書架や閉架書庫を維持している。だから、ある資料を購入・寄贈で受け入れるか（狭い意味での資料収集）を考えるとときには、資料単体の評価だけでなく、全体のバランス（類書の有無、蔵書の厚薄）やサービスマニュアル

(分野別コーナーや重点取組事項の有無など)、除籍の動向など、様々な情報を勘案して行うのが常である。

収集方針については、図書館法に基づいて2012年に出された「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」(文科省告示第172号)で、「市町村立図書館は、利用者及び住民の要望、社会の要請並びに地域の実情に十分留意しつつ、図書館資料の収集に関する方針を定め、公表するよう努めるものとする」ことが求められている。例えば、鳥取県立図書館は『鳥取県立図書館のすがた』¹⁾という図書館概要に鳥取県立図書館「資料収集方針」「資料保存方針」「資料除籍要領」を、調布市立図書館は全てがコンパクトに詰まった「調布市立図書館資料の収集・保存・除籍に関する基本的方針」²⁾を、横浜市立図書館はどの分野をどう判断しているかが具体的に分かる「横浜市立図書館資料収集基準」³⁾を、それぞれの図書館のウェブサイトで公開している。地元の図書館や今話題の図書館を見る際は、「どんな方針を定め、それをどう公開しているか」を一つの視点とされることをお勧めする。収集方針だけでなく保存や除籍(資料を廃棄すること)の方針があるか、また、大まかな方針だけでなく細かいところまで

定めた基準はあるか……などを着眼ポイントとして持っているとなお良い。

また、収集の力点によって記述(文言の書き方)が変わってくるので、資料収集方針や基準を読むときには文言に注意する必要がある。例えば国立国会図書館の資料収集方針書⁴⁾を読む時には、同ページにある「重要度の表現について」(表1)を念頭に置く。これはその分野をどれくらい受入れるか……を表現した言葉なので、図書館への営業を考えている担当者への参考になる。「厳選して収集する」(概念・資料価値、当館蔵書構成上の必要性、他館所蔵状況等を総合的に評価し慎重に収集する。寄贈は受入れ可)は「ほとんど受入れない」と同義なので、こういう表現をしている分野の本の営業をかけるには工夫が必要だ。一方、「網羅的に収集する」(概念・該当する資料のすべてを収集する)は「何でも受入れる」と同義なので、こうした表現を見つけたら、該当分野の目録やパンフレット送付を検討すべきである。この文言の概念は、横浜市立図書館ほか全国の図書館でも採用しているので参考にされるとよいだろう。

収集レベルにも留意が必要だ。例えば全国の公共図書

館で5本の指に入る蔵書数を誇る横浜市中央図書館は「ここに来れば何でもある」と利用者によく言われるが、資料の種類(表2)によっては収集の力点に強弱がある。中央図書館の館種別収集基準(表3)の1～3を図式化すると、主要な全集、叢書▽概説書、専門書及び学術研究書▽入門書等となり、中央図書館は入門書より専門書収集に力を入れているし、さらに主要な全集や叢書は出来る限り買う、という収集の重点が見えてくる。

収集方針を片手に書架を見るようにすると、図

表1 重要度の表現について(国立国会図書館 資料収集方針書)

重要度	文言	概念
0	収集しない	収集せず、寄贈も通常断る。
1	厳選して収集する	資料価値、当館蔵書構成上の必要性、他館所蔵状況等を総合的に評価し慎重に収集する。寄贈は受入れ可。
2	選択して収集する	評価選択して収集する。刊行年や予算、入手方法(国際交換、寄贈以外は不要等)による制約を付す場合がある。
3	積極的に収集する	多様な出版情報を集めて収集すべき資料の選書を積極的に行う。当該資料群において価値のある資料が漏れないよう留意する。
4	できる限り広く収集する	該当する資料をできる限り多く収集する。
5	網羅的に収集する	該当する資料のすべてを収集する。

表2 資料の種類についての表現(横浜市立図書館資料収集基準・収集基準の記述)

文言	概念
基本的な資料	物事のよりどころとなる資料
入門書	初学者の手引きとして書かれた解説資料
概説書	全体にわたってその大体を説明している資料
実用書	実地や実務において役に立つ資料
(学術)研究書	よく調べ考えて真理をきわめるための資料
専門書	特定分野または内容について書かれた資料

表3 一般(大人)用図書館資料 中央図書館(横浜市立図書館資料収集基準・館種別収集基準)

1 概説書、専門書及び学術研究書を中心に収集する。
2 入門書等は必要に応じて収集する。
3 主要な全集、叢書は積極的に収集する。
4 改訂版、増補版及び年次刊行の図書は改訂、増補等の意義が大きい場合は積極的に収集する。
5 同一著作の日本語訳の異版は積極的に収集する。
6 豪華本、高価本、復刻版、ムックは資料的価値に留意しながら選択的に収集する。
7 刊行点数の少ない主題、所蔵の少ない主題について留意する。必要に応じて既刊書も収集対象とする。
8 主要な資格、検定の解説書は必要に応じて収集する。学習参考書や試験問題集は、限定的に収集する。
9 横浜市立図書館全体としての蔵書構築の視点から、地域図書館での収集が困難な図書に留意する。

書館蔵書の見え方が変わる。収集しないとしている分野の本が少ないのは、その図書館の収集方針に起因する問題であって、選定者の力量を測る尺度にはなり得ない。ちなみに、どこの館でもそうだが、蔵書構築の現状が基準に適合しているかどうかを正確に検証するにはOPACで検索する必要がある。ないように見えても貸出中や書庫にあるだけだった、ということはままあるからだ。とはいえ、書架にある本がその館を様々に顕わしていることは確かなので、筆者が図書館見学する際は、自分がある程度習熟している分野、例えば医療健康情報や法情報に絞り、基本書や入門書、専門書とそのバランスを見ている。このジャンルは本の新しさが重要な要素となるので、蔵書がきちんと更新されているかどうかを測る目安ともなる。人文書や郷土資料の場合はその反対に、古くても役立つ基本書をきちんと公開に出し続けているか？ という観点があるだろう。

特に除籍や書庫入れは、選定者の資料選定眼と方針が大きく試される。例えば参考資料のような常置資料は、貸出数では判断できない。だから、図書館の資料

収集を評価する時は、購入資料リストだけでなく書庫入れ資料や除籍資料リストも検証したほうがよいと思う。武雄市図書館の指定管理者となったCCCが、新館オープンの際に新聞縮刷版や地形図、県でも未所蔵の地域の郷土誌を廃棄し、代わりにゾッキ本のような新古書を購入したことが問題となったことは記憶に新しい。こうした蔵書構築の流れをトータルで見ないと、図書館の資料に対する考え方はわからないということだ。

以上が図書館選定の基本知識である。

図書館の選書の実際

しかしながら、基準はかなり大まかなものであり、実際の選定ではさらに多様な観点から選択をしている。そこでこの項では、図書館の現場では実際にどのように選書を行っているかをご紹介します。

筆者が現在所属するサービス課は、専門書を重点収集する調査資料課とは異なり、西区の地域館としてポピュラーな資料を所管する部署である。職員の半数は児童書選定、半数が一般書選定に携わっており、筆者は一般書

の家政学分野の担当である。中央図書館におけるこの分類の主な内容と選定基準は(表4)の通りで、つまりは料理や裁縫、片づけや育児など家事一般の実用書がメインだ。以下、実例を挙げながら選定の流れを詳述する。

* * *

1. 出版された文脈を読む

ある本を買うかどうか悩んだ時は、まずは周辺状況を調査し、どういう文脈で出てきた本かを考える。たとえば4月に『マッサ MASSA パブリカでつくる美味しい調味料』(栗山真由美/著、池田書店)という本が選定情報に載った。ここでまず、①そもそもマッサって何だ? ということが話題になり、②なぜ今、マッサなのか? と合わせて調査した。すると、①マッサとはパブリカを原料にしたポルトガルの発酵調味料であること。②発酵調味料は、ここ数年

表4 一般(大人)用図書館資料図書収集基準 中央図書館 590(家政学)分類
(横浜市立図書館資料収集基準より抜粋)

NDC	綱目表	NDC	要目表	概念
590	家政学・生活科学	590～592	家政学 生活科学 家庭経済 経営 家庭理工学	概説書、研究書に留意する。 実用性の高い図書を選択的に収集する。 エッセイは著者、話題性に留意する。
		593 594	衣服 裁縫 手芸	概説書、研究書に留意する。 実用性の高い図書を選択的に収集する。 エッセイは著者、話題性に留意する。 季節や流行に留意する。
		595	理容 美容	概説書、研究書に留意する。 実用性の高い図書を選択的に収集する。 エッセイは著者、話題性に留意する。
		596	食品 料理	概説書、研究書に留意する。 実用性の高い図書を選択的に収集する。 エッセイは著者、話題性に留意する。 飲食店紹介は地域、情報量、客観性等に留意する。
		597	住居 家具調度	概説書、研究書に留意する。 実用性の高い図書を選択的に収集する。 エッセイは著者、話題性に留意する。
		598	家庭衛生	医学的記述の分かりやすさと正確さに留意する。
		599	育児	概説書、研究書に留意する。 実用性の高い図書を選択的に収集する。 エッセイは著者、話題性に留意する。 特に医学的記述の分かりやすさと正確さに留意する。

のていねいな暮らしブームで手作りを愉しむ人びとの間で、塩麴、塩レモンが話題となっている。マッサもどうやらその文脈で注目されているようだ、ということが分かり、選定の組上に乗せた。

2. 類書の調査と内容の比較検討

次に類書の調査をする。類書がある場合は、オリジナルな発想や新奇性はあるか、編集(写真や造本など)はいいか、レシピなど作り方の記述は有用(丁寧でわかりやすい)か、など内容の吟味をする。類書がない場合は、内容に特に問題がなければこの時点で買いとる。担当者間でこれらの感覚を共有するために便宜的に使っている符牒は「ニュー」「オリジナル」「使える」「ベスト」などで、これらのキーワードが当てはまれば、買い。その他、予約が多い、アマゾンなどのランキングが上位でレビューが良質、書評が出た……など「人気」「評判・評価」の高さも参考にする。一方、ブームに乗って出された後追いで粗末な編集の本は選定落ちとなることが多い(これは便宜的に「ドジョウ本(柳の下のドジョウ狙い、から)」と呼んでいる)。

ちなみに『マッサ』は、「ベストマッサ本」を選びたいとしばらく待ったが、結局類書も後続書もなく、「オンリーマッサ本」であること、また、版元の池田書店は塩麴・塩レモンブームの火付け役でもある、ということで購入となった。

3. おまけ/付録のついてる本について

たとえ書店での売り上げが上位でも、「ホロー容器つき」などモノがメインである本は、図書館では基本的に買わない。バッグやシリコンスチームなど、個人が所有して使うための付録で、それ自体に情報はなく他者とシェアできないものは公共図書館資料としては不適當と判断される。ただし、DVDやCD-ROMなど付録も〈有用な情報源〉であり、他者とシェアできるものは別である。特にDVDの場合は、図書館で貸出可能かどうか……が購入するかどうかを分ける。

4. 既刊本も検討

4月には〈ホロー容器〉という言葉がタイトルに入った本が連日発刊されていて、どうやらホロー容器が

ブームのようである……と話題になった。そこでまた、今なぜホーロー容器？ という文脈を考えていたのだが、その検討過程で、『野田瑛瑯』の本『マーブルトロン、2007年』という、ブームの嚆矢となった本を買ひ漏らしていることが分かった。こういう場合は、新刊ではなく既刊をサルベージすることもある。永く使い続けられる定番書(いわゆるロングセラー)を買うことは、図書館のストックブックとしての蔵書補強となるからだ。武雄市図書館の購入問題の余波で、海老名市立中央図書館リニューアルオープン時に教育長が「購入する本はすべて新刊本」と表明したが、既刊書から有用な本を再評価して選定することも図書館の役割であると考えている。

5. 地域性に配慮

地元の版元や地元の店／食材などが紹介されている場合も、購入する確率が上がる。また、当館は野毛にレストランや居酒屋などが多いので、プロ用の専門料理書も選定対象としている。

6. 著者性を見る

料理書や手芸、片付け本にもファンが多い。人気の著者がいて、著者性の有無も判断基準の一つとなる。同じジャンル・人気著者でも1冊1冊丁寧に独自の境地を切り開く著者と、複数の出版社から同工異曲の本を出し過ぎだったり、次々に流行のジャンルに手を出す著者は、前者の評価が高くなる。

* * *

公開している選定基準では1冊1冊の選定について細かい指定はなく、そこから先は司書の判断となる。担当間で勘所を共有できる言葉が欲しかったので、以上のような観点を符牒として言語化してみたが、昨年まで担当していた9類(文学)と比べ、実用書の選定は基準が明快で分かりやすいと思った。選定理由が簡素化できれば選定会議の効率化がはかれる。

以上の事例は実用書選定の勘所であり、分野によって観点は様々に変わる。その他の参考事例として、筆者が関わった立ち上げ時の医療情報コーナー選定方針を別表にした(表5)。人文書の事例があげられれば良かったの

表5 医療情報コーナー選定方針(横浜市中央図書館)

コーナー名	医療情報コーナー
基本コンセプト	病気や医療について調べるとき最初にアクセスすべき参考資料を常置する
選定方針	<ol style="list-style-type: none"> 1) 医師・看護師やコメディカル・一般市民向けと3段階のレベルに留意 2) 定番の事典や学生用標準テキストは基本資料として揃える 3) 3~5年以内の発行が目安 4) エビデンス(科学的根拠)に基づいているもの 5) 医学書で定評のある出版社のもの 6) 医師など専門家が監修を行っているもの

だが、筆者は人文書の選定担当の経験がないため、ご容赦いただきたい。

誤解して欲しくないのだが、図書館は良い本だけを選ぶところではない。ただ、予算には限りがあるので、結果的に選ぶ必要が生ずるのだ。その際、何故それが世に出たのかを社会の文脈の中で考え、それを手渡す利用者を思い浮かべて有用かどうか、1冊1冊を丁寧に選んでいる。さらに付け加えれば、図書館はあくまで市民の図書費をあくまで、現在と未来の市民のために蔵書構築を行っているのだ、ということをお忘れぬように心掛けています。

“鳥取モデル”で考える図書館と書店の理想的な関係

2015年10月29日に朝日新聞が「本が売れないのは図書館のせい? 出版社や作家が新刊の貸し出しに『待った』と報道した」⁽²⁾。出版不況が叫ばれるようになった2000年代以降、出版界と書店界・図書館の関係は決して良好とは言えず、様々な火種がくすぶり続けているが、本当にそれでいいのだろうか……という想いが筆者にはある。そこで、図書館と書店が良好な関係を結び、地域の読書文化推進に貢献している事例をご紹介します。

数々の優れた活動で全国の図書館から注視されている鳥取県立図書館だが、図書館界よりも出版界・書店界で注目されているのがその収書システムだ。2011年に『文化通信』の読書週間特集で取り上げられ、“鳥取モデル”と名付けられた⁽³⁾。県立図書館は厳しい地方財政の中で、1997年以降継続して年間1億円以上の図書購入費を確保しているが、図書はすべて地元の書店を通して定価で購入している。そして、この状態を維持する

ために図書館と書店双方が知恵と力を出し合い、並々ならない努力を続けているのが「鳥取モデル」の実像なのだという。以下、文化通信記事と2015年夏に定有堂書店の奈良敏行氏に行ったインタビューを元に詳述する。

県立図書館の図書購入には二つの形がある。書店が直接図書館に持ち込む本から司書が選択購入する「見計らい」と、司書が選定リストから選んだ本を書店に注文する「選定発注」だ(奈良氏)。

文化通信によれば、県立図書館はこれらすべてを、年度初めに公募した「見計らい」参加書店を通して購入している。応募の条件は、鳥取県書店商業組合に加盟していることと、県に納税していること(ただしこれは理念的なもので、書面上の条件は「鳥取県競争入札参加資格者名簿への登録」)。月に1〜2回行見計らいの図書を揃えるためには、版元から情報を収集し、図書館に選ばれそうな本を目利きし、取次に注文するという「書店側に相当な力量がないと対応できないこともある」(松本兵衛・元県立鳥取図書館長)ため、納入書店は6〜7書店にほぼ固定されている。

県立図書館が地元書店から購入する理由について、文化通信では「税金を払っているところに還元しなければならぬ」という思い(松本氏)と説明していたが、価格勝負となる競争入札を避け、地元書店と定価で随意契約を行うためには「地場産業育成」だけでは理由にならないはず、と奈良氏は見えており、重要なのは、県立図書館と地元書店組合が協働で作り上げた「共創ブランディング戦略」だと分析する。

たとえば杉島書店では、書店見計らいとして持ち込む本をいったん同店の書架に並べる「図書館に持って行く棚」を入り口脇に設けている。図書館の見計らい向けに仕入れる図書は、通常の配本では入荷しないような人文書や専門書が多い。それを図書館に納入する前に書店に並べると「普段の目線よりちょっと上の目線の「背伸びした棚」ができる。そこに客が付き、リピーターができるれば店の仕入れも変わって来る。地域の書店にブランディングを確立させるような手助けを、県立さんはされている」(奈良氏)。つまり、図書館見計らいの本を書店の棚づくりに活かすことで地元書店を育て、一書店でなく書店組合としてそれに取り組むことで書店を通して地

域文化を醸成するという、好循環の「地域共創プランディング戦略」が地域書店との随契を可能にしているも一つ理由ではないか、というのだ。また、定価購入が維持できるのは「書店が資材を負担して装備まで行うことを値引きと説明しているからではないか」と奈良氏は説明する。しかし装備に使うフィルム代や手間は書店の負担ではないか、と奈良氏に問うと「装備負担分は経費で落とせるから、値引きより定価の方が書店にとって是有難い」のだという。

奈良氏は、地元の書店が持ち込む「身の丈の本」が図書館の選書に役立つ側面も指摘する。「よくベテランの司書の方が、買わない本を見ることが大事なんだ、とおっしゃるんですけど」「見計らいの棚を埋めるには『背伸びした本』だけだと間に合わないの、普段扱っている品物、つまり書店で地域の人が買っている『身の丈の本』も持って行く」ことで「図書館をよく利用される方じゃなく、その周辺の方々の読書傾向っていうものに、司書の方々が出合うことができる。それが、リスト選書では出合えない情報になっている」のだという。つまり、日頃の図書館利用者からは測れない地域の生情報、

読書する人々の素の姿を、地元書店の見計らいというシステムを通じて図書館に届けているのだ、と。

鳥取モデルと見計らいの仕組みを伺ったあと定有堂書店に寄り、店頭に平積みされている『つるとはな』が目に留まった。選定リストには乗らない直取引の本であり、定有堂でも最初は客注で仕入れたのだという。「身の丈の本」の話进行い出し「横浜の図書館でも先日予約で購入し、よく借り出されています。県立に持ち込んだらどうでしょう」と奈良氏に声を掛けた。仕事帰りに立ち寄った県立図書館の職員が偶然居合わせて「今度持つて行ってもいいのでしょうか」「いきいきライフ応援コーナー（鳥取県立図書館が設置している高齢者向けの特設コーナー）にいいかもしれないね」と会話している。後日横浜に戻って、県立図書館の蔵書検索をすると、その本がコーナーに置かれ、貸出されている様子が確認できた。図書館と書店のいい関係とは、例えばこういう日常の姿なのだろう。

おわりに

私が司書として主に過ごしてきたのは、バブル崩壊後の「失われた20年」の日本である。1990年代は図書館にとっても激変の時代であり、図書館と職員は様々に変わらなければならなかったし、現在も変わり続けている。それは、書店界や出版界も同様だろう。図書館は書店と出版社の隣人なのだと声を大にして言いたい。より良い関係を作っていくにはどうしたらいいのだろうか。拙稿で伝えた図書館の選定の姿や書店との関係事例が、今後を一緒に考えていくための参考になれば幸いである。

《参考文献一覽》

- (1) 「鳥取県立図書館のすがた」平成27年版
- (2) 「調布市立図書館の収集方針」
- (3) 「国立国会図書館資料収集方針書」
- (4) 武雄市図書館が開館前にDVDを大量除籍
(Chika Igaya, Huffpost Japan, 2014年4月25日)
- (5) 海老名市立図書館「選書やり直しへ 武雄市図書館問題が「飛び火」」(Chika Igaya, Huffpost Japan, 2015年9月18日)

- (6) 吉田倫子、公共図書館で健康・医療情報を提供する…横浜市中央図書館の医療情報コーナー、医学図書館、Vol.54(2007) No.3, p.264-269
- (7) 本が売れぬのは図書館のせい? 新刊貸し出し「待った」
(板垣麻衣子、朝日新聞、2015年10月29日)
- (8) 星野渉、「鳥取モデル」にみる 図書館と書店の可能性
【2011年・読書週間特集】文化通信、第3970号、
2011年10月31日

吉田 倫子(よしだ みちこ)

神と、仏と、哲学と——「現代哲学への招待」への招待

小林 公二（春秋社編集部）

「ひととはなぜ哲学に惹かれるのか」なんていうと、うさんくさいと思うひともあるかもしれない。というか、むかしは哲学は必須の教養みたいなところがあつたけど、最近は、「哲学なんか興味ないね」ってひとも多いんじゃないか。貧困とか、景気とか、犯罪とか、安全保障とか、そうした具体的な問題は大事だと思うけど、なんで哲学？　そもそも哲学ってなにをする学問なの？　それどころか、すこし哲学について知ってるひとだって、哲学っていうのは抽象的でどうでもいい問題に情熱をかたむけて、屁理屈ばかりこねている学問だって印象を持つているかもしれない。

でも、なぜかはわからないけど、哲学に惹かれるひとは哲学に強烈に惹かれてしまうのです。たぶんわたしも

そのひとりだと思ひ、たくさんの方に哲学の本を読んでもらいたいと熱烈に思っている。それに、実は哲学って、結構役に立つ代物じゃないかと思うこともたまにはあるのだ。

ただ哲学の本はとても理屈っぽいし、ひどく精緻に厳密に書かれていることが多い。実はそこがいいところでもあって、その難解な理屈が「わかった！」と思えたときには、すっきり爽快なカタルシスなんだけれど（わたしのぼあい、あとでそれがたんなる勘違いだとわかって、また悩むことが多いんだけど）、そういうマゾヒスティックな快楽にめざめていない読者にとっては、まどろっこしかったり、しちめんどくさいのではなからうか。

というわけで、そんなこんな考えた結果、ここではま

ず、わたしが思う哲学の魅力の一端を、大ざっぱかついい加減に、そしてできれば、ちょっと違った角度から述べることができないだろうかと考えてみたしだいである（同様のコンセプトで、いろいろなジャンルの哲学者へのインタビューをまとめたのが、「現代哲学への招待」シリーズの『哲学者は何を考えているのか』です）。もつとも、わたしはけっこうな豆腐メンタルなので、びくびくしながら書き進めることになるんだけど……。

輪廻と復活について考える

それで、わたしが選んだテーマは、恐縮ながら「死」なのだ。人間、みんな死ぬのだから、かならず直面しなければならぬし、生きていることはつらいから、だれでもふとした拍子に無常感にとられることがあるだろう。そういう意味では、だれにとってもおなじみのテーマだ。わたしなんかよく死について考える。いまここにこうしているじぶんが死んだらどうなるのか？ 死んだら無になってしまうのか。いや、そもそも無になるってどういうことだろうか。

でも、考えたってわかりはしない。なぜって、じぶんが無になるってことは、ここでこうして考えているじぶんがなくなるってことで、しかし考えているじぶんがなくなったら、そもそも考えることができないわけだから、そんなこと、考えられるわけがないじゃないですか（こういう話は哲学だけじゃなくて、禅僧の南直哉老師などもよく書いてますね）。

ということですよ、もしかして、わたしたちは純粹な無ってものについて考えることができないのかもしれない。つまり無についていくら考えても、考えているかぎり考えているじぶんはあるわけで、結局、無について考えているつもりでも、そのじつ、じぶんしか存在しない世界——つまり孤独について考えているだけなのかもしれない。

そうだ、死んだら輪廻りんねする、って考えかたもある。でも輪廻ってどういうことか考えだすと、これまたやっかいだ。死んだあとべつの人間とか生物として生まれかわることらしいけど、記憶とか能力や才能とか顔つきや体つきとかとか、そんなものはつぎの生にもっていけないらしい。

その一方で、輪廻というばあい、前世のそのひと(ないし生物)といまのじぶん、あるいは、いまのじぶんと来世のそのひと(ないし生物)は、なんらかの意味で同一でなければならぬ。だって、たとえばわたしが武田信玄の生まれ変わりだとして、武田信玄とわたしはまったく無関係の別人です、なんてことになったら、それはたんに、むかし武田信玄というひとがいて、いまわたしがいるってだけのことであって、そんなものはそもそも生まれ変わりとはいわないでしょ？

しかし、記憶も、性格も、肉体も、そのほかのなにかもがぜんぶ違うのに、「同一です」なんて本当にいえるのか。しかも輪廻のばあい、死によって、すべてがいったん変わってしまうのだ。哲学者のライブニッツは『形而上学叙説』のなかで、あるひとが突然中国の皇帝になるんだけど、記憶も性格もすべて失ってしまうって例をあげて、それは、もとのじぶんが消滅して、べつのだれかが新しく生じただけだと考えてもいいんじゃないか、といっている。

こういう疑問を防ぐためだろうか、インド思想では自己の同一性を(無理やりにでも)保証するアートマン(我)と

いうものを指定するのがふつうだけれど、仏教は「無我」がモットーで、アートマンを認めないというものだから、議論がいよいよ錯綜するわけです。

仏教が輪廻ならキリスト教は復活だけれど、やはり似た問題があるように思う。最後の審判のとき、すべての死者は復活するのだけれど、そのとき復活するわたしって、ほんとうにこのわたしなんだろうかという疑問。

とはいえ、復活のばあいは輪廻と違って、肉体は生きていたときと同じ肉体ってことでいいだろうし、生きていたときの記憶ももって復活できるはずだ。死んだあと肉体が腐敗し朽ち果てているとしても、そこは全知全能の神さまのやることだから、ちゃんともとの肉体にくれるはずなのだ。

ここでちょっと哲学でよく出てくる思考実験ってやつをやってみよう。神さまは全知全能なんだから、このわたしの目の前に、わたしとまったくおなじ人間をもうひとり創造することもできるはずだ。身長も体重も容姿も、からだを構成する分子の結合の仕方や数までまったくおなじ。わたしとおなじ記憶、おなじ性格、おなじ趣味……とにかく精神的にも肉体的にも、なにからなま

でわたしとおんなじで、違うのは、そいつはわたしの目の前にいる、ってことだけだ。

では、そいつはわたしだろうか。明らかにちがう。だって、わたしはここにおいて、そいつはわたしの目の前にいるんだから！

とすると、最後の審判のとき、神さまはわたしを復活させ、いまのわたしとまったくおなじ肉体と精神を新たに作りだしてみせるだろうけれども、それが、いま目の前にいるそいつじゃなくて、この「わたし」であるかどうか……。

ふむ、それでは、神さまはそのひとが生きていたときとまったく同じ原子や分子から肉体を復活させなくてはならない、としたらどうだろう。神の全知全能をどう理解するかというにはあるけど、あるいは、原子や分子の同一性をいうことに意味があるかどうかもおいとして、とりあえず目の前におなじ人間を創造したとしても、同じ原子はふたつとないとなれば、目の前のそいつとわたしは、分子の構造とかそういうものが一緒というだけで、個々の原子や分子は別ものだから別人だ。したがって復活のばあいなら、生前の肉体とまったくおなじ原子や分

子からわたしの肉体が再創造されるのであれば、復活したわたしは生前のわたしと同一だといえるのではあるまいか。

ところがですね、そうすると、トマス・アクィナスが『対異教徒大全』で提起した「人食い人種のパラドクス」という問題が出てくるのだ。

人食い人種が探検家を食っちゃった。探検家の肉体は人食い人種のなかで消化吸収され、人食い人種の一部になった。さて、復活の日、神さまがその人食い人種を復活させようとすると、探検家の体の部分が足りなくなる。探検家のからだを復活させようとすると、人食い人種からの部分が足りなくなる。どうしたらいいの？ という話である。

現代に人食い人種はいないというひともあるだろうけど、そのひとのからだを構成していた物質が、火葬されて煙となって空に昇って、雨となって降ってきて、それが野菜や果物のなかに入って、だれかに食べられたと考えればおなじだ。そうすると、神さまは、やっぱりどこかべつのところから原子や分子をもってくるしかないんじゃないだろうか（このパラドクスについてはラッセル『西洋

哲学史』(2)を参照)。

ともあれ、こう考えていくと、輪廻のばあいも復活のばあいも、これは哲学の重大テーマのひとつ、「個体の同一性」の問題だとわかってくる。つまり仏教やキリスト教など宗教について考えるときにも、哲学について知っておいたほうが、はるかに充実した議論ができるわけですよ(分析哲学的手法で神学の問題を考える「分析神学」については、山口尚「分析神学の誕生」春秋二〇一一年一〇月号を参照。生前肉体を構成していた物質が復活のときまた集められるというのは、たとえばアウグスティヌス「エンキリディオ」を。同一性についてはサイダー＋コニー『形而上学レッスン』やサイダー『四次元主義の哲学』などを読んでくれると嬉しい)。

なぜ「現代」哲学なのか

ところで、わたしが担当している「現代哲学への招待」は、現代哲学の名著やすぐれた入門書を提供するシリーズだ(監修 丹治信春・日本大学教授)。しかし哲学の歴史は長い。古代ギリシアから中世、近代と、すぐれた哲学者はそれぞれそ綺羅星のようにいる。プラトン、アリス

トテレス、トマス・アクィナス、カント、ヘーゲル……、だれでも知ってるような有名人がずらりと並ぶ。反対に現代哲学といったら、フランクファートとかサイダーとかクラークとか、もちろん知るひとは知っている偉大な哲学者たちだが、一般の読者からすれば、「だれすか、それ？」なんていわれてしまいそうな気もする。

しかし「現代」であることはきわめて重要だ。それは科学も社会も思想も、時代とともに変わってしまおうし、変わらざるをえないという当然のことなのだ。

たとえば、アリストテレスが脳を思考する器官でなくて、体温を調節する器官だと考えていたことは有名だ。また慣性の法則は知られていなかったから、投げられた物体が空を飛びつづけるのは、物体がかきわけた空気がその物体のうしろにまわりこんで押しつづけるから、と考えたそうである(八木雄二「天使はなぜ墮落するのか」を参照)。だが、そんな未熟な自然科学的知識を前提に、現代において、たとえば、こころの哲学を展開できるだろうか。現代のこころの哲学は、脳科学や認知科学と密接に連携していることは周知である。あるいは、二〇世紀最重要哲学者のひとりデイヴィッドソンは『真理と述定』

の序文のなかで、この本で中世の哲学者たちをスルーしたことについて、(ものすごく簡単にいえば)中世の論理学は不十分なので、スルーしてもさしつかえないと考えたとといった意味のことをいっている。

過去の哲学者たちは偉大だし、その著作は読み継がれていかにくちやいけな。でも時代というものはある。もちろんかれらは時代を気にしながら哲学したわけじゃない、じぶんじしんの問題を真摯に考えただけだったかもしれないが、かれらが自覚しなかったとしても、その思索や思想に時代の刻印がくつきりしるされているのもまた事実だと思うのだ。

だから、自然科学や数学や論理学の発展、あるいは社会の変化にもなって、あらたに提起される問いもある一方、古い問いもあらためて問いなおされなきゃいけないし、答えもあらためて検討され答えなおされなければならぬはずだ(これは哲学だけじゃなくて、仏教思想や神学もそうだと思う)。その結果、過去の哲学者たちの議論が維持されることもあれば、徹底的に否定されることもあるだろう。

そうして問いなおされ、答えなおされている哲学の現

在が詰まっているのが、まさに「現代哲学への招待」シリーズなのだ。たとえばソーパーの『進化論の射程』では、神が生物を創造したという「創造論」が、ひとつの科学的仮説として、その批判者だったヒュームの主張とともに現代の見地から再検討され、進化論のほうが創造論より優れた説であると示されている。そうした成果は哲学の専門家やファンを越えて、さらに多くのひとびとに読まれ共有されてしかるべきものだと、わたしは強く信じている。

小林 公二(こばやし こうじ)



シリーズ現代哲学への招待(既刊 21 冊)

書名	著訳者名	価格
Basics		
哲学者は何を考えているのか	J. バジーニ+J. スタンルーム／松本俊吉訳	3200円
形而上学レッスン	E. コニー+T. サイダー／小山虎訳	3200円
科学哲学	A. ローゼンバーク／東・森元・渡部訳	3800円
Great Works		
主観的、間主観的、客観的	D. デイヴィッドソン／清塚・柏端・篠原訳	4000円
合理性の諸問題	D. デイヴィッドソン／金杉・塩野・鈴木・信原訳	4000円
真理・原語・歴史	D. デイヴィッドソン／柏端・立花・荒磯・尾形・成瀬訳	4500円
真理と述定	D. デイヴィッドソン／都留竜馬訳	3200円
君はいま夢を見ていないとどうしていえるのか	B. ストラウド／永井均監訳	3800円
知覚のなかの行為	A. ノエ／門脇俊介+石原孝二監訳	3800円
四次元主義の哲学	T. サイダー／中山康雄監訳	3800円
現代普遍論争入門	D. アームストロング／秋葉剛史訳	3500円
思想と実在	M. ダメット／金子洋之訳	2700円
理性の権利	T. ネーゲル／大辻正晴訳	3200円
進化論の射程	E. ソーバー／松本・網谷・森元訳	3800円
生まれながらのサイボーグ	A. クラーク／呉羽・久木田・西尾訳	3500円
Anthology		
言語哲学重要論文集	G. フレーゲ他／松阪陽一編訳	4200円
自由と行為の哲学	H. フランクファート他／門脇俊介・野矢茂樹編・監修	3600円
アリストテレスの現代形而上学	T. E. タフコ編／加地・鈴木・秋葉・谷川・植村・北村訳	4800円
Japanese Philosophers		
穴と境界——存在論的探究	加地大介	2800円
現代唯名論の構築——歴史の哲学への応用	中山康雄	3200円
進化という謎	松本俊吉	3600円
(以下続刊)		

* 哲学の現在を多角的に浮き彫りにするシリーズ(四六判・上製)

* 監修=丹治信春・日本大学教授

2015年特約店グループ訪問報告

前号の3班に続き、最後の4班目の報告を致します。

群馬・富山・石川方面

報告 西野浩文(勲草書房)

● 期日 7月22日(水)～7月24日(金)

● 参加メンバー 平石修(御茶の水書房)、藤井若菜彦(筑摩書房)、岩野忠昭(白水社)、西野浩文(勲草書房)

● 訪問書店(訪問順)

【群馬】 紀伊國屋書店前橋店、煥乎堂本店、ブックマン

ブアカデミー前橋店、戸田書店高崎店、ブックマンズ

アカデミー高崎店、くまざわ書店イーサイト高崎店

【富山】 BOOKSなかだ本店、紀伊國屋書店富山店、

文苑堂書店福田本店、喜久屋書店高岡店

【石川】 うつのみや本店、紀伊國屋書店金沢営業部、金

沢大学生協角間購買書籍、紀伊國屋書店金沢大和店、

文苑堂書店示野本店、金沢ビーンズ明文堂

● 感想 今回のグループ訪問では、昨年秋季の研修旅行で訪れた群馬(前橋・高崎)、そして人文会としては二〇一二年以来の北陸(富山・石川)を二泊三日の旅程で訪問しました。

北陸は今年三月、念願の北陸新幹線開業を迎え、観光を中心に様々なキャンペーンで注目を集める旬のエリアです。東京から金沢まで、最速の「かがやき」に乗れば片道二時間半。行楽シーズンには宿泊の予約が困難になるなど、観光客増加で金沢のホテルや飲食店は好景気になっているいました。金沢のひとり勝ちとも言われるなか、新幹線効果による沿線エリアの産業・経済の活性化をどこまで波及させることができるかが、今後の大きな焦点であるように思います。

初日に訪問したのは群馬。東京から高崎まで新幹線で約一時間、上越新幹線と北陸新幹線はここで新潟方面と長野・北陸方面へわかれます。高崎市の人口は約三七万

人、隣接する県庁所在地の前橋市は約三三万人で、二都市を合わせれば北関東でも有数の商圈ですが、車で十分ほどの範囲に大型書店やSCがひしめきあい、オーバーストア気味。主に郊外の幹線道路沿いで競争がくり広げられています。

訪問した書店のなかで、集客力では大型SC内の紀伊國屋書店前橋店が優位。ただし人文書の棚はやや特色に欠け、メンテナンスが不十分な印象でした。文真堂書店が展開するブックマンズアカデミー前橋店は、専門書の品揃えでは県下有数。一時期、棚や在庫数を削減していましたが、お店のコンセプトに立ち返りふたたび専門書の充実を図っているほか、一階の入口近くに人文書新刊コーナーを設置しているのも特徴です。煥乎堂本店は、前橋市街地の空洞化で集客に苦勞しているものの、郷土本の品揃えや三階の古書コーナーに老舗ならではの個性を感じました。

高崎に目を移すと、戸田書店高崎店とブックマンズアカデミー高崎店が近距離でしのぎを削る図式。前者は店長が熱心で、フェアや教育書に力を入れています。後者はショッピングモール内にあり、客層はファミリーや女

性客が中心。同じブックマンズアカデミーでも前橋店と客層が異なるため、どのように差別化を図るか苦心している様子でした。高崎駅ビル内のくまざわ書店イーサイト高崎店は、立地のよさから客足が多く、軽めの読み物や新刊・話題書向き。一方で棚に古い本が目立つのが気になります。

二日目は富山からスタートし、高岡を経て金沢へ。富山市は人口約四二万人、地方都市の多くが抱える中心市街地の空洞化に対し、路面電車やバスなど公共交通機関を活用したコンパクトなまちづくりをめざし、早くから市街地活性化を図ってきました。中心部の複合商業施設・総曲輪フェリオ内の紀伊國屋書店富山店は県内有数の売場面積を誇ります。訪問後の八月には、通りの向かい側に富山市立図書館新本館が開館。周辺の商店街も一時期に比べて人の流れが増え、今後も近隣の再開発が予定されているそうです。他方、郊外店ではBOOKSなかだ本店が専門書を多く揃えています。若い人文書担当者には意欲的で、棚に文庫なども取り交ぜ、入門書と研究書をバランスよく並べようという工夫が感じられました。九月には富山駅の北側エリアに北陸最大規模の複合

店・文苑堂書店富山豊田店がオープン。郊外の競争も激化が予想されます。

つぎに訪れた高岡市は人口約一七万人、富山県第二の都市です。富山駅から「つるぎ」(金沢・富山間を往復)に乗って約十分の新高岡駅は、今年の北陸新幹線開通と同時に開業しました。在来線の高岡駅がある市内中心部からは少し離れ、新高岡駅近くのイオンモールに喜久屋書店高岡店、幹線道路沿いに文苑堂書店福田本店があります。前者の客層はファミリーが多く、人文書は軽めの読み物を中心。後者は宗教書や歴史書に力を入れ、人文会の毎月のオススメ書コーナーも展開していますが、集客力が課題です。新高岡駅ができて、書店では目立った集客につながっていないのが現状のようでした。

その後、金沢へ。北陸新幹線の開業で最も乗客数が増えた金沢駅は、福井や関西方面への列車も乗り入れる北陸の一大ターミナル駅。市の人口は約四六万人で、江戸時代は加賀百万石の城下町として栄え、名実ともに北陸地方の中核都市ながら、市街地に大型書店は少なく、地元の人たちは主に郊外店を利用する傾向にあるようです。そのなかで、中心街・香林坊から近いうちのみや本店は

老舗らしい硬質な品揃えで、繁華街の書店では最も専門書が充実しています。大和百貨店内の紀伊國屋書店金沢大和店は一般書が中心でした。

郊外の主要書店では、金沢駅を挟んで市街地と反対側のエリアに、金沢ビーンズ明文堂と文苑堂書店示野本店があります。前者は石川県庁舎や県立中央病院に近く、人の流れでは優位。売場面積も大きい半面、専門書の棚はあまり手入れが行き届いていないのが目につきました。後者はTSUTAYA併設型の書店で、化粧品や文具を含めた幅広い展開が特徴。お能の宝生流謡本を陳列した立派な専用書棚があり、地域ならではの特色を感じました(江戸時代に前田家が能楽を保護し、庶民に奨励したことから、金沢はお能の盛んな土地。「加賀宝生」と呼ばれ、宝生流が愛好されています)。

金沢ではほかに、紀伊國屋書店金沢営業部と金沢大学生協角間購買書籍を訪問しました。前者は北陸三県を担当し、主な顧客は国立大学の図書館。所蔵調査にもとづく販促や情報提供の仕方について意見交換を行いました。生協は中規模ながら、顧客の先生方を意識して新刊を中心とした品揃え。研究室や図書館へのご案内にも力を入



北陸新幹線

れているそうです。

観光客の増加が顕著な金沢の書店でも、総じて新幹線効果による集客や売上への増加は実感に乏しいとのことですが、うつのみや本店で聞いた「外国人の観光客が増え



文苑堂書店示野本店 宝生流謡本コーナー

て、日本の漫画や関連する作品集を買っていく」という話は興味深いものでした。

私たち出版社にとっては、北陸新幹線の開業で富山や金沢を気軽に訪問できるようになり、今後はこれまでに以上に情報交換の機会が増えることを期待しています。最後になりましたが、お忙しいなか、快く時間を割いてくださった書店、生協の皆様にご心よりお礼申し上げます。

2015年研修旅行報告

広島・松山・高松

広報委員会 乙子 智(慶應義塾大学出版会)

● 期日 2015年10月21日(水)～23日(金)

● 訪問先

【広島】フタバ図書MEGA祇園中筋店、ジュンク堂書

店広島駅前店、紀伊國屋書店広島店、MARUZEN

広島店、廣文館金座街本店、紀伊國屋書店広島営業所

【松山】愛媛大学図書館、愛媛大学生協城北ショップ、

SerenDIP明屋書店アエル店、ジュンク堂書店松

山店、紀伊國屋書店いよてつ高島屋店

【高松】宮脇書店総本店、宮脇書店本店、紀伊國屋書店

高松店、ジュンク堂書店高松店

2015年秋の研修旅行は、広島での書店・営業所訪問の後に四国へ渡り、松山にて愛媛大学図書館の見学・研修と市内各店の訪問、それから高松へ移動して書店を巡見する行程となった。研修旅行での訪問としては、広島は2010年以来5年ぶり、松山は1987年以来約30年ぶり、高松は2013年以来2年ぶりとなる。東京との行き帰りは空路、広島から四国へ渡るのは高速船、松山から高松へは特急電車、各市街地での移動はバス・タクシー……とあらゆる交通手段を駆使しての移動は、47回目となった人文会研修旅行の中でも異例だろう。今回も全会員社20名に加え、販売会社(大阪屋・トーハン・日販)3名に同行いただき総勢23名となった3日間の研修旅行について、以下、ご報告したい。

10月21日(水)

昨年、一昨年と台風の接近に脅かされ、ましてや今年度は空路を利用するため台風の影響が非常に懸念されて

いたが、幸い前週までに行き過ぎ無事にスタートをきる
ことができた。8時45分発のJAL255便にて広島
空港へ。

最初に訪問する広島市は人口約120万人を擁する、
言わずと知れた中国・四国地方最大の都市である。書店
業界に引きつけてみても、広島駅前からの徒歩圏内に
ジュンク堂書店広島駅前店、市街地にMARUZEN
広島店、紀伊國屋書店広島店など、いくつもの大型書店
がひしめく大きな商圈を形成している。

とはいえ、降り立った広島空港は広島市街地から
40km以上離れた山腹に位置しているためバスでまず市
街地へと向かう。途中、今回1軒目の訪問先となるフタ
バ図書MEGA祇園中筋店(売場面積530坪、以下同様)
を訪問。広島市街地からアストラムライン(広島市の市街
地と住宅地を結ぶ第3セクター運営によるモノレール)で15分ほ
どに所在する郊外型大型複合書店だが、あいにく店長、
人文書担当者は不在。事前にご連絡していた商品部の芝
健太郎さんに出迎えていただき、店内を見学させていた
だいた。

市街地へと移動し、お好み村にて昼食をとりつつ大阪

屋の池上貴文さんと合流。次は広島駅前の福屋百貨店に
入るジュンク堂書店広島駅前店(760坪)を訪問し、水
上新生店長と人文書担当の高下明子さん、藤川理沙さん
にご挨拶。事前アンケートで水上店長が書いてくださっ
た通り、「音楽ホールのような高い天井」とさらにその
天井までびっしりと配置された壁際の書棚は非常に壮観。
他の丸善ジュンク堂書店の店舗と比べても開放感が強い
が、高所恐怖症ではこのお店の業務はきつと務まらない
だろう。

3軒目の訪問先である紀伊國屋書店広島店(600坪)
は、3階がバスセンターという特殊なショッピングセン
ターの6階に位置している店舗で、昨年6月に改装をお
こない、店内の様子も一変されたとのこと。当日は長谷
川紀雄店長と人文書担当の木下愛子さんに出迎えていた
だいた。人文書の棚はそれほど多くはないものの、担当
の木下さんのメンテナンスのもと、定番書と新刊がコン
パクトにまとめられ、また一押しの本には絵付きの手製
POPが付いているなどの工夫が見られた。

そこから徒歩で、天満屋八丁堀ビルのMARUZEN
広島店(1220坪)へ向かう。このビルは1〜5階がヤ



紀伊國屋書店広島店のPOP

マダ電機、6階がユニクロ、そして7、8階が書店で、人文書の棚もある7階フロアには美術画廊やタリーズコーヒーも出店しており、ビル全体として非常にコンセプトが分かりやすく集客力の強い構成となっている。加藤芳樹店長と人文書担当の丸田香織さんにご対応いただいた。

次は、昨年来、人文書棚についてご相談をいただいている廣文館の金座街本店(210坪)へ。その名の通り、広島市中心部のアーケード商店街である金座街に所在。店長の藤森真琴さん、本部の岡本礼子さん、山中潤一さん、江藤宏樹さんにご挨拶し店内を見学させていただく。地域に密着したお店らしく広島カープグッズコーナーの充実ぶりが目を引いた。

そこからまたバスへ乗り込み、初日最後の訪問先である紀伊國屋書店広島営業所へと向かうが、ここにかけて、大都市広島を半日で回るといふ行程のひずみが顕在化し、交通渋滞によって到着時間が大幅に遅れてしまった。滞在時間が10分程度となったことで、岩崎猛中・四国営業部長がパワーポイント資料を準備して下さっていたにも関わらず、大幅に割愛してのお話になってしまった。

大変申し訳なく思うとともに、しっかりと全て拝聴できなかったことは非常に心残りだった。ぜひあらためての機会に拝聴したい。

松山へと向かう高速船の時間が差し迫っていたため、急ぎ広島営業所を辞し、広島港へ。なんとか無事四国・松山へとわたることができ、長い初日が終了。

10月22日(木)

2日目は、松山で愛媛大学図書館と愛媛大学生協を含む4書店を訪問してから高松へ移動という流れになる。

松山市は愛媛県の県庁所在地であり、四国地方で最大の人口を擁する都市(約52万人)でもある。道後温泉で有名な古くからの温泉地で、訪問時には「蝸川実花×道後温泉道後アート2015」というイベントも開催されていた。もともと正岡子規や夏目漱石ゆかりの地として「文学の街」を謳っていたのに加え、近県で開催される「瀬戸内芸術祭」と同様にアートによる地域の活性化も促進しているようである。

この日最初に訪問する愛媛大学図書館が属する愛媛大学は、1949年に愛媛県内の旧制高校・専門学校4

校を母体として成立した国立大学で、現在6学部6研究科が設置され、学生数は約9500名。地域連携活動も活発に行っているようで、今回訪れた城北キャンパスには「愛大ショップえみか」という大学ブランド品や地域の特産品を揃えたお店も存在する。

城北キャンパスへ入構し図書館入口へと向かうと、図書資料整備を担当されている宮部明日香さんに出迎えていただいた。そのまま2班に分かれて図書館内を見学させていただき、普段は見られない所蔵庫の見学や、NDC分類の更新に対応しながらの整理作業の難しさを、学生へのサービスの試行錯誤など、興味深いお話もうかがえた。館内見学の後、会議室にて宮部さんと前任の上山朋子さんから、図書購入における選書を中心とした業務のご説明とそれをもとにした意見交換を行い、大学図書館と出版社が協力して行く上で必要となる情報を得る貴重な機会となった。

図書館を辞した後、同じ構内の愛媛大学生協城北ショップ(60坪)を訪問。今年の2月にリニューアルオープンしたということで、店内も清潔感があり居心地の良い空間になっている。また、書籍売場は広いとは言えな

いものの、品揃えは充実し、目線位置のゴールデンゾーンの棚に新刊を面陳展開するなどの生協書店ではあまり見られない特徴も見られた。書籍を統括する高野将宏店長は、大学生協事業連合の専門書を調査するグループにも参加されているそうなので、今後のさらなる手腕に期待したい。

次は、Serendip明屋書店アエル店(140坪)へ。明屋書店は1939年に松山市で創業された地域を代表する老舗書店である一方で、昨年セブンイレブンを併設する店舗を出店するなど新しい形の業態にも積極的に取り組んでいる。今回訪れたSerendipアエル店は、書籍だけでなく、雑貨、文具も取り揃え、デザインナーへ発注した新しいタイプの什器を使用するなど、ライフスタイル提案型の店舗で、当日は明屋書店取締役の瀬川定伸さんと中森淳店長に出迎えていただいた。8月にオープンしたばかりということで中森店長も「手探りの状態」とのことだが、地方書店の新しいあり方として注目される。

昼食をとった後、ジュンク堂書店松山店(550坪)へ移動し、海田良二店長と人文書担当の木崎麻梨子さん、

原佑季子さんにご挨拶。今回の研修旅行では珍しい多層階の路面店であり、どことなくジュンク堂書店池袋本店を彷彿とさせる店構え。やはりそうした条件を反映したものの、海田店長によると、客層も本に詳しい固定客が多いとのこと。

一方、次に訪問した紀伊國屋書店いよてつ高島屋店(190坪)は、その名の通り百貨店いよてつ高島屋の7階のテナントショップで、訪問時には隣の催会場で北海道物産展が大変な盛況ぶりであった。中村真店長にはご挨拶できたものの、人文書担当者は不在だったため詳しいお話はうかがえなかったが、フロアの他店舗からみても、シニアを中心としたファミリー層が主な客層と推測される。

松山市内の書店訪問を終え、松山駅から特急いしづち22号にて高松へと向かう。隣県ではあるもの150kmもの距離があるため、所要時間も2時間半ほどかかる。高松駅に着くとすぐに待機していたタクシーに分乗し、宿泊地であり懇親会会場でもあるオークラホテル高松へ移動。夕方からの懇親会には、丸善ジュンク堂書店取締役副社長の岡充孝さんや、翌日訪問予定の

ジュンク堂書店高松店の升伶人店長を初め、普段はあまりお会いできない販売会社の四国支店の方たちにもいらしていただき、ささやかながらも実りのある有意義な会となった。

10月23日(金)

最終日は高松市内の4店舗を訪問。帰りの飛行機を逃さないよう時計を注視しながらの移動となる。

高松市は香川県の県庁所在地で、人口約42万人を擁する地方都市であり、四国の玄関口として、国の出先機関や全国規模の企業の四国支社が集中する四国の政治経済の中心地でもある。その中心街である丸亀町商店街の再開発事業が進む一方、昨年高松天満屋が閉店したコトデン瓦町ビルが「瓦町FLAG」として今年の10月にリニューアルオープンし、市況にどのような影響を与えていくかも注目される。

高松市の書店でまず訪れたのは、県内最大規模の売場面積を誇る宮脇書店総本店(2000坪)。店内の会議室にて、宮脇書店代表取締役社長の宮脇範次さん、商品本部部長の渡辺三千代さん、総本店店長の山下郁夫さん

から、宮脇書店と人文会との長年にわたるお付き合いや、地元書店としての矜持について等、さまざまなお話をうかがい、厳しくも温かい対応に宮脇書店との強いつながりを再認識するとともに身の引き締まる思いがした。なお、後日渡辺さんより御連絡をいただき、人文会も普及を促進している「人文図書3目録」の御注文をいただいたこともここに付記し、感謝したい。

バスは市街地に向かい、高松丸亀町商店街の宮脇書店本店(700坪)へ。現在は350店以上を展開する日本最大の全国チェーンである宮脇書店の第一号店でもある。広瀬弘幸店長にご挨拶し店内を見学させていただくと、2階のフェア棚にて人文会とトーハンの共同企画「ベストセクション」フェアが展開されているのが目に留まった。年に3回定期的に全国の書店にご案内している販促材だが、実際にこうして店舗で展開されている様子を見ると、今後展開していく書籍の選定をする際にもイメージがしやすくなり、非常にありがたい。

そこから徒歩で丸亀町壱番街の紀伊國屋書店高松店(290坪)へ移動し、大藪宏一店長にご挨拶。一昨年から今年にかけて何度かリニューアルを行い、売場面積を



宮脇書店本店のベストセクションフェア

縮小したとのことだが、同じ荻番街のテナントにも瓦町FLAGに移転する店舗があるようで、今後は商店街全体としての集客が課題となるだろう。

昼食をはさんで、今回最後の訪問先であるジュンク堂書店高松店（1128坪）へと移動。この日がグランドオープンで、工藤恭孝代表取締役社長を初めとする本社

なることが予想された。また、店内には直営のカフェがあり、ショッピングに疲れたらここで休むこともできる。以上で全行程が終了。ここで大阪屋の池上さんとお別れし、高松空港へ。

今回の研修旅行は移動にかかる時間が長く、特に初日の広島では訪問先がかなり限られてしまい残念な部分も

の方たちもたくさんお見えになっていた。また、瓦町FLAG自体のグランドオープンということもあり、ビル全体が大変な盛況で、かえって大人数での訪問がご迷惑をおかけしてしまうのではないかとという危惧もあった。店内は一フロア1128坪という売場面積に加え、他のジュンク堂書店の店舗よりも什器の高さが低く、さらに広大な印象を受ける。展開する書籍についてはまだまだ調整中であり今後充実させていくというところで、東京や大阪、福岡といった大都市にも引けをとらない店舗と



瓦町FLAG

あったが、逆に広島と松山との高速船での移動の簡便さ、松山と高松との意外な距離感など、実際に訪れてみないと実感できない経験ができたのは収穫だった。今回訪問できなかった四国の2県、高知県、徳島県についてはまた別の機会となるだろう。

この3日間、お世話になった書店・販売会社の方々には心よりお礼申し上げます。また、ご同行いただいた大坂屋の池上貴文さん、トーハンの桜井秀則さん、日販の駒村一雄さん、どうもありがとうございました。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷5-32-21 みすず書房内

2015年12月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	西浩孝	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
柏書房(休会中)		113-0033	文京区本郷2-15-13 お茶の水ウィングビル9F	3830-1891	3830-5337
紀伊國屋書店	志田則幸	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子智	108-8346	港区三田2-19-30	3451-6926	3451-3124
勁草書房	西野浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	片桐幹夫	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	島田孝久	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	新保卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森卓巳	101-0064	千代田区猿樂町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口大介	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑摩書房	藤井若菜彦	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元博樹	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社	五月女公	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	福田祐介	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	須藤圭	101-0052	千代田区神田小川町2-4-17 大宮第一ビル6F	3296-1615	3296-1620
未来社	水谷幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	片山伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 田崎洋幸
 会計幹事 平石修
 書記幹事 新保卓夫

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎片桐幹夫 ○朝倉哲哉・志田則幸・水口大介・森卓巳・五月女公・須藤圭
 調査・研修委員会 ◎橋元博樹 ○片山伸治・西野浩文・福田祐介・藤井若菜彦
 広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子智・西浩孝・島田孝久・水谷幹夫

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報/各社へのリンクはこちらからどうぞ)

人文会ウェブサイト、リニューアルのご案内



このたび人文会のウェブサイトのリニューアルいたしました。人文会の活動をこれまで以上に積極的にアピールしていくため、この機会にコンテンツを大幅に見直しました。フェアや人文会会員社の刊行物の書評掲載情報の他、各社おすすめの一冊を集めた注文書「今月の一押し」、タイムリーなテーマで選書した「人文会ベストセレクション」など、是非お役立てください。

URL <http://www.jinkokai.com/>

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

●人文図書目録刊行会発行 A5判・平均245頁 頒価本体(各)286円



◆哲学・思想図書総目録2015-2016年版

約2,200点(134社) 収載。

[掲載分野] 哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学/現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN 978-4-915268-31-1



◆心理図書総目録2015-2016年版

約3,200点(116社) 収載。

[掲載分野] 心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心理/精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN 978-4-915268-32-8



◆社会図書総目録2015-2016年版

約2,800点(138社) 収載。

[掲載分野] 社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉教育/社会心理/社会問題/文化文明論/文化人類学 ほか

ISBN 978-4-915268-33-5

*ご注文は書店にお願いいたします。

●人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21(みすず書房内)

●人文図書目録刊行会

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24(トーハンビル内)

TEL 03-3266-9521(事務局)

『人文書販売の手引き [第2版]』 刊行のお知らせ

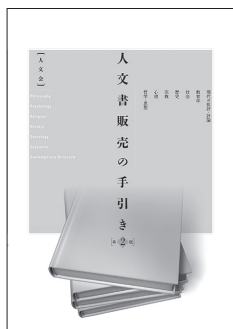
『人文書販売の手引き』とは、人文会が編集・発行する書店員様向け人文書販売マニュアルです。このたび、データを大幅に更新した第2版が完成しました。より使いやすくなった「人文書販売の手引き」を店頭活性化にぜひご活用ください。

(前略)しかしながら昨今、状況は一変しました。中堅やベテランといえるキャリアの方から教を請われることが多くなり、このことは当然、若手の書店員の方々にも影響してしまいます。なので、このような状況を打破するためにも、マニュアルの作成が必要であると判断しました。

「人文書販売の手引き」には、役立つヒントは載っていますが答えは載っていません。あくまで骨組みの提示であり、肉付けするのはそれぞれのご担当者です。大変恐縮ですが、試行錯誤して頂きながら、個々のお店に合った答えを導き出して頂ければ幸いです。

(『人文書販売の手引き』第2版刊行に際して)より)

<p>『人文書販売の手引き』第2版の目次</p> <p>1. 人文書販売の基礎知識</p> <p>2. 人文書販売の具体的な実践</p> <p>3. 人文書販売の課題と解決策</p> <p>4. 人文書販売の未来展望</p>	<p>1. 人文書販売の基礎知識</p> <p>1.1 人文書の定義と特徴</p> <p>1.2 人文書販売の重要性</p> <p>1.3 人文書販売の歴史と現状</p> <p>1.4 人文書販売の課題と解決策</p> <p>1.5 人文書販売の未来展望</p>	<p>2. 人文書販売の具体的な実践</p> <p>2.1 人文書販売の企画と実施</p> <p>2.2 人文書販売の宣伝と販促</p> <p>2.3 人文書販売の接客と顧客対応</p> <p>2.4 人文書販売の在庫管理と発注</p> <p>2.5 人文書販売の売上向上と利益確保</p>	<p>3. 人文書販売の課題と解決策</p> <p>3.1 人文書販売の課題</p> <p>3.2 人文書販売の解決策</p> <p>3.3 人文書販売の成功事例</p> <p>3.4 人文書販売の失敗事例</p> <p>3.5 人文書販売のベストプラクティス</p>	<p>4. 人文書販売の未来展望</p> <p>4.1 人文書販売の未来展望</p> <p>4.2 人文書販売の未来展望</p> <p>4.3 人文書販売の未来展望</p> <p>4.4 人文書販売の未来展望</p> <p>4.5 人文書販売の未来展望</p>
--	---	---	--	--



『人文書販売の手引き』第2版は、人文会ウェブサイトよりダウンロードできますので、是非ご利用、ご活用ください。

<http://www.jinbunkai.com/>

『人文書販売の手引き [第2版]』

編集・発行：人文会

B5判並製84頁 2015年10月1日発行

ISBN978-4-915735-07-3 (非売品)

シリアルキラース P・ウロンスキー
連続殺人犯(シリアルキラー)の歴史を詳細に描き、彼らの犯行とその行為と心理にさまざまな見地から迫る。
3600円

消費は誘惑する

遊廓・白米・変化朝顔 貞包英之

近代日本、とくに十八、十九世紀の日本社会をライバルに、消費がいかなる社会の変化を産み出したのかを探る。
2800円

建築と歴史 飯島洋一

建築界のみならず東西の近現代史のあらゆる深層に潜り込み、現代日本が抱える困難の核心を鋭く衝く挑戦の書。
3400円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidosh.co.jp/> (価格税別)

完結!

吉本隆明

〈未収録〉講演集

把握された限りの〈未収録〉講演すべてを収め、40年間講演を追いつけた編集者によってテーマ別にまとめられた決定版、ついに完結。●全12巻セット 本体26200円+税

筑摩書房 サービスセンター 048-651-0053
*価格は定価(本体価格+税)
<http://www.chikumashobo.co.jp/>

明治大正史

上 下

中村隆英 著

原朗・阿部武司 編



好評
たちまち
4刷!

多彩な人物が躍動する激動の日本近代史を鮮やかに描き出す、碩学による名講義が甦る。 各3000円

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/> (価格税別)

創元社

ロジャーズの中核三条件

- ① 一致
- ② 受容 無条件の積極的関心
- ③ 共感的理解

あらゆる対人援助で必須とされ、いまや常識ともなった「傾聴」。その根底にある「二つの条件を各々がたがいに照応させながら、基礎から応用まで解説。

村山正治・飯長喜一郎・野島二彦 監修
本山智敬・坂中正義・三國牧子 編著

各巻定価 本体2200円+税

〈本社〉大阪市中央区淡路町4-3-6
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
〈支店〉東京都新宿区神楽坂4-3 Tel.03-3269-1051
<http://www.sogensha.co.jp/>

「ブラック自治体」の実像

上林陽治

非正規公務員 深化する格差

増加する非正規公務員を取り巻く深刻な格差・無権利状態を検証し、処遇改善への方途を明らかにする。

◎本体1900円＋税

精神科医が診る、中森明菜から神聖がまっちゃんまで

ポップスで精神医学

山登敬之・斎藤環・松本俊彦・井上祐紀
井原裕・春日武彦

◎本体1800円＋税

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <http://www.nippsy.co.jp/>

カール・ポランニーの 経済学入門

ポスト新自由主義
時代の思想
若森みどり



市場原理主義批判を超えた一人間のための経済を説くポランニーの思想から、現代を生き抜くヒントを探る。

◎本体880円＋税

平凡社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6574 fax 03-3230-6588
<http://www.heibonsha.co.jp/>

《ものと人間の文化史》

167

花札

花札をその本来の輝き、自然を敬愛して共存する日本の文化という特性のうちに描いた本格的な研究
四六判・上製◇374頁◇本体3500円＋税

江橋 崇 著

173

かるた

外来の遊技具でありながら、和紙や和食にも匹敵する存在として発展したへかるたの全体像を描く。
四六判・上製◇366頁◇本体3500円＋税

江橋 崇 著

法政大学出版局

東京都千代田区九段北3-2-3 ※価格は税別
☎ 03(5214)5540 <http://www.h-up.com/>

主体性とは何か？

マルクス主義哲学からバタイユやドゥルーズの問題系へとつながる幻の講演録！ 澤田直、水野造一 訳

熊谷英人

◎本体価格3400円＋税

フランス革命という鏡

◎十九世紀ドイツ歴史主義の時代
革命史から歴史主義へ。ドイツ精神史遍歴の旅。

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp/>

暗黒の大陸

ヨーロッパの20世紀

マーク・マズワー 著
中田瑞穂・網谷龍介 訳

自由や民主主義こそが(真のヨーロッパ)でナチズムやレイシズムは(逸脱した野蠻)なのか。民主主義とヨーロッパの屈折した関係を語り明かす世界的大家の名著、待望の翻訳。

5800円



未来社

〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
TEL03-3814-5521 FAX03-38145596
<http://www.miraisha.co.jp/> ※表示は税別

集合住宅30講

植田実 ル・コルビュジエのユニテほか十九世紀末以降の国内外の名作について縦横に説き明かす。カラー写真多数 四〇〇〇円

パクリ経済

コピーはイノベーションを刺激する

ラウステイアラ&スプリグマン コピーがイノベーションを刺激する法則を具体例で提示。山形浩生・森本正史訳 三〇〇円

世界文学論集

クツツエー エラスムスからガルシア・マルケスまでを緻密に読むノーベル賞受賞作家のベスト批評。田房芳樹訳 三〇〇円

セザンヌ

ダンチエフ どのようにしてセザンヌの技法は生まれたか?最新の研究成果から成る伝記決定版。二見史郎ほか訳 六〇〇円

みすず書房 (税別)

東京都本郷 5-32-21 <http://www.msuz.co.jp>

アジア・太平洋戦争辞典

吉田 裕・森 武麿 編
伊香俊哉・高岡裕之 編

特価25000円(縮切16年3月末、以降27000円)「内容案内送呈戦後七〇年」。私たちがあらためて問い直すための約二五〇〇項目。

「昭和天皇実録」講義 生涯と時代を
読み解く

古川隆久・森 暢平・茶谷誠一編 誕生から逝去まで、記述の要点を平易に解説。最も信頼の置ける「実録」ガイド。 18000円

吉川弘文館 東京都文京区本郷 7-2
☎03-3813-9151 / 税別

京都大学教授 鎌田浩毅 監修 著

せまりくる

「天災」とどう

向きあうか

B5判 装幀カバー100頁 /
1800円 / オールカラー

京大生殺到の人気講義「地球科学入門」を担当する“科学の伝道師”鎌田浩毅先生がビジュアルでやさしく解説する。

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税別 / 宅配可

意識と脳

思考はいかにコード化されるか
スタンニラス・ドウアンヌ 高橋 洋訳

私たちの思考、感情、夢は
どこからやってくるのだろうか？

認知神経科学の世界的な研究者が、
膨大な実験をもとに究極の謎に挑ん
だ野心的論考。 ▶2700円+税

消費社会の 神話と構造 (新装版)

ジャン・ボードリヤール 今村仁司、塚原 史訳
すべては消費される
「記号」に過ぎない——

1970年にいち早く「消費社会」という
概念を提示し、時代を拓いた先駆的
名著の決定版！索引付。▶2100円+税

紀伊國屋書店

出版部：東京都目黒区下目黒 3-7-10
営業TEL 03(6910)0519
<http://www.kinokuniya.co.jp/>

大反響・たちまち4万部

SEALD^S

民主主義ってこれだ！

SEALDs 編著

☆全世代から絶賛！「自分の言葉で
考え表現する若者たちの姿に感動」
「何度も涙が出ました」

暴走する政治にNOを突きつけた若
者たちの行動は世代を越え歴史を動
かした。ムーブメントの渦中でメン
バー自身が撮影、編集・デザインま
で手がけ、一人ひとりの素顔と肉声
を記録したビジュアルドキュメント。

A5判カラー・1500円

東京文京 大月書店 電話03-
本郷2-11 3813-4651
www.otsukishoten.co.jp 税別価格

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

叡知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦

若松英輔著 日本古典的思想性を「詩」
の言葉で論じた小林秀雄——古今・
新古今の歌に日本の哲学を見出した井
筒俊彦——二人の巨人を交差させ、
詩と哲学の不可分性に光をあてる、清
廉な一冊。 ◎2,000円

慶應義塾大学三田哲学会叢書 ars incognita

小さな倫理学入門

山内志明著 愛とは何か、正義とは何か、
欲望とは何か、偶然性とは何か、人生に
意味はあるのか、そして「私」とは何か。
身近な物事を通して、人間の弱さや卑し
さに眼差しをむける、倫理学の入門書。

◎700円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

日本軍「慰安婦」問題webサイト制作委員会 編

Fight for Justice フックレット1

Q&A「慰安婦」・強制・性奴隷

—あなたの疑問に答えます—

本体1200円+税

Fight for Justice フックレット2

性奴隷とは何か

—シンポジウム全記録—

本体1200円+税

Fight for Justice フックレット3

Q&A朝鮮人「慰安婦」と

植民地支配責任

—あなたの疑問に答えます—

本体1400円+税

「慰安婦」問題の本質とその責任を解明する。
戦後70年「阿倍談話」の問題点を指摘し、
新しい歴史修正主義に反論する。

御茶の水書房

東京都文京区本郷5-30-20 電話03-5684-0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

2015年12月11日発行 年3回発行 第122号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21

編集協力 アジール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉